932-Sh12-16ウ
1200500759842
932
H12
16

鄭太善木鈴　アピスクーエシ

始

932
SH12
16

世界名著物語文庫

ハムレット

シェークスピア　鈴木善太郎

新文社刊

982
222

解題

ハムレット

第十六世紀の半ばを過ぎた一五六四年四月二十三日（?）に、ストラフォード・オン・エヴォンといふイングランドのウォリック州の田舍町に雜貨商の第三子として生れたウィリアム・シェークスピアは、十三歳の時平凡な小學兒童としての生活を打切つたきり、父の家業を助けるために、學業を續ける暇がなかつた。十八歳の時隣村の農家の娘で八つ年上のアン・ハザウェーと呼ぶ婦人を娶り、やがて三人の子の父となつた。

彼がもしロンドンに出なかつたら、彼はかうして田舍町の一雜貨商として、平凡な一生を送つたことであらう。二十二歳の時、彼はロンドンに出た。ふとした機會からその頃次第に隆盛になつた劇場に俳優として扉はれたのがもとで、やがてその劇場の座附作者となつたのが二十六歳の時であつた。それから四十七歳までの二十一年間に、その作るところの戲曲は實に三十七篇に及んだ。四十七歳の時、世間の風潮が變つたことを知り、筆を折つて故郷に隱退し、多年の勤勉による貯へのお蔭で富裕な餘生を樂しみながら、六年後の五十三歳の春、平凡で非凡なその一生を靜かにをへた。時に一六六一年であつた。

イギリスの文學の中で、最もひろく讀まれるものはシェークスピアであり、シェークスピアの諸作の中で、最もひろく讀まれるものは「ハムレット」である。これは昔も今も變りがない。

「ハムレット」は永遠の生命を持つ戯曲である。

文學史家の研究によると、「ハムレット」の書かれたのは、一六〇一―二年で、シェークスピアの三十七八歳の時であるといふ。この劇の材料は第十二世紀後半のデンマークの歴史家サクソ・グラマチカスの「デンマーク歴史」に依つたものである。ただ「デンマーク歴史」に現はれるハムレットは粗野と殘虐を極めるもので、シェークスピアの教養の深い思慮深いハムレットは別然違つた性格を持つてゐる。「ハムレット」がかく世間に喧傳せられるに至つたのは、まつたく獨自の性格を作り上げたシェークスピアの功績と言はなければならない。

ハムレットはデンマークの王家に生まれて育つた極めて感受性の強い青年である。その父は伯父のために失はれ、その母までこの伯父のために奪はれた。そして王室の周圍は、虚僞と罪惡と追從に充ち滿ちてゐた。極めて聰明な、教養の高い、敏感な青年にとつて、かかる環境の中に投げられるとすれば、いきほひゲーテのいつたやうに、「投げ棄てることの出來ない重荷の下に倒れてしまふ」よりほかはない。陰慘な憂鬱症がここから來る。行爲の能力を失つたほど、行爲に對して遲疑逡巡するのはこのためである。そして彼の冥想も、皮肉も、諷刺も、躊躇も、戀愛も、この特異な性格を飾つてゐる。要するに「ハムレット」は人間性の永遠の象徴である。

「ロメオとジュリエット」はシェークスピアの二十七歳の時の作と稱せられてゐる。一五六二年に出たイギリス詩人アーサー・ブルクの叙事詩から材料を得たものであるらしい。世界文學に戀

愛劇は數多いが、「ロメオとジュリエット」ほど美しい純情な悲劇は、まつたく他にないと言つてよい。南歐暑熱の地に育つたジュリエットが蒸暑い夏の夜、燃えるやうな情火の炎に身を焦がす冒險は、北歐寒冷の地に生れた「ハムレット」のオフィリアの白百合のやうな氣品の高い戀と好對の對照をなすものである。

昭和二十一年九月

鈴木善太郎

目次

ハムレット……七
亡霊……九
亂心……一七
破れ鐘……三
草を待つ馬……三五
垂帳のかげ……四四
夕食中……四八
柳の下……五八
墓掘り……六九
試合……七六
ロメオとジュリエット……九一
舞踏會……九三
果樹園……九八

待つ宵……一〇二
追放……一〇四
朝の獵歌……一一一
迷迭香……一一〇
和解……一一四

ハムレット

亡霊

デンマークの王子ハムレットは、父王の突然の急逝でウィッテンベルク大學から歸つて來た。それからもう二箇月になるが、未だに大學に戻らうとする樣子もない。

彼はもう學問には興味を失つてゐた。學問ばかりではない、人生のあらゆるものに、彼は希望が持てなくなつた。彼はこの世界に疲れ果てた。荒れるに任せた花園は花一つ咲かずに、雜草のみ生え繁るとしか思はれなかつた。

父は母にとつては愛すべき善良な良人であつた。そして母ゲルトルートはまた父にとつて愛すべき從順な妻であつた。それに母は父の死後二た月になるかならないうちに、父の弟で、兄とは似もつかぬ邪惡な性格のクロヂアスと結婚してしまつた。片方の眼には笑みを浮べ、片方の眼には涙を湛へて、祝つて葬儀を終へ、泣いて婚儀を執り行つたことは、國民總意の推擧にほかならぬとクロヂアスは言ふが、ハムレットにしてみれば、この腹黑い叔父こそ王位と王妃の簒奪者でなくて何であらう。考へれば、父の死因についても疑念がある。父がいつものやうに庭園に眠つてゐた時、毒蛇が來て父を刺したのだと人はいふ。しかしその毒蛇こそクロヂアス自身ではなかつたのか。想像はハムレットを苦しめた。彼はその苦惱に堪へられなかつた。

彼は喪服を着とほした。父の死を紀念する暗いその喰ひ入るこの服裝を、彼は一時もやめなかつた。母の結婚の祝の日にさへ、母の苦情をよそに聞き流して、彼は頑固にこの喪服を脫がうと

はしなかつた。

「ハムレットよ、さうした夜の色を脱ぎ棄てて親しくわが君を仰ぎなさい。いつまでも眼瞼を俯せて、父君を地の下に探すのはやめたがよい。生きとし生ける者が死に、現世から永遠の命へと過ぎゆくのは世の常です。」と母のゲルトルードは言つた。

ハムレットは憂鬱に答へた。

「さうです、母上、常のことです。」

「としたら、どうしてそなただけが、常ならぬ姿に見えるのです。」

「母上、このインキ色の上衣が何でせう。風のやうな溜息や、溢れがちなこの涙や、しほれきつたこの憂ひ顔が何でせう。そんなものはわたしのほんたうの姿ではない。見せかけを超越するほんたうのものは、この中にあるのです。」

ハムレットは自分の胸を押へて見せた。クローヂアス王は満足げにうなづいた。

「そちがそちの父に對して、かくまでに哀悼の本分をいたすことは、美しくまた褒むべきそちの性質を語るものだ。しかしながら、あまりに哀悼に執着することは、神意にもとる片意地の行爲である。父親の先立つことは世の常のことだ。人の死があつて以來今日に至るまで、この道理に變りはない。どうかこの無益の悲嘆を地に一擲し、われらを思ふこと、眞の父を思ふがごとくあつてほしい。そこで廣く天下に布告して、そちを王位繼承者として推挙する。」

ハムレットは横を向いた儘答へなかつた。喰ひ入るやうな無氣味な沈默が暫く續いた。王妃は

愛情を籠めた聲で言つた。

「ハムレットよ、そなたの母の祈りを無駄にしないでおくれ。どうぞいつまでもここに一緒にゐて。ウィッテンベルグへはもう二度と戻らないで。」

「力の及ぶかぎり、母上のお言ひつけに從ひませう。」

ハムレットは力無げに答へた。

この一言は王と王妃をこの上なくよろこばせた。王はハムレットのこのやさしい同意を嘉して、乾盃を上げるために一同を連れて奥に去つた。デンマーク王は多分巨砲を以て天に告げるであらう。そして天は地上の霹靂に反響して、再び王の祝宴に應へるであらう。

城内の大廣間に唯一人殘されたハムレットは、憂鬱な考へ事に鎖された。ああ、この硬い肉が溶けて、露のやうに消え失せたら、それとも自殺を禁じ給ふ神の掟さへなかつたら。この世の事は何一つ物憂く、氣ぬけて、無意味で、無用に見えないものはない。父が亡くなつたあの二た月前の日まで、父と母は汲めば汲むほど愛の渴きが增すやうであつた。それが一と月と經たぬうちに……移り氣よ、なんぢの名は女だ……氣の毒な父の亡骸の後について、涙にくれながら歩いた靴の古びもしないうちに、母は叔父と結婚してしまつた。ああ、かうもすばやく淫慾の床に駈け行くとは……

「君の御安泰をおよろこび申します。」

ハムレットはその聲に空想を破られた。彼は驚いて振りかへつた。挨拶の聲の記憶はまだ新ら

しかつた。聲の主はウィッテンベルグ大學の舊友ホレーショであつた。

ハムレットはホレーショの側に駈け寄つた。彼は聲を喘ませて言つた。

「おゝ、ホレーショ、何としてウィッテンベルグからここへ。」

「怠け根性からでございます。」とホレーショは言つた。そして面白さうに屈托のない聲で高笑ひをした。

「いやいや、御身の敵がさう言はうとも、予は聞かないぞ。まして御身の口からさうした惡口を予の耳に信じさせようとはどうしたことだ。御身が怠け者でないことはよく知つてゐる。だがこのエルシノアでの用事は何か。今に大酒を飲むことを教へられるばかりだぞ。」

「實は御父君の御葬儀を拜觀にまゐりました。」

「なぶるのはよしてくれ。大方母上の婚儀を見るためであらう。」

ホレーショは急にその顏を暗くした。彼は低聲になつて言つた。

「まつたく御婚儀はあまり急でしたな。」

「儉約、儉約だよ、ホレーショ。」とハムレットは皮肉に叫んだ。「葬式に用ゐた燒肉を、冷えたままで婚禮の食卓へ持出さうといふ奴さ。たとへ敵と天國で廻り會はうともあの日を見たいとは思はなかつたよ。まあ、父上——父上のあのお姿がこの眼の底に見えるやうな氣がする。」

そしてハムレットは長い溜息を吐いた。

ホレーショは突然急に言つた。

「わが君、わたくしは昨夜お目にかかりました。」

「お目にかかつたと。誰に。」

「先君でいらせられた御父上に。」

「なに、父上だと。」

ハムレットは驚いて叫んだ。

ホレーショは話した。見張りの士官マーセラスとバーナードは、高臺で二た夜續けて先王の亡靈を見た。始めホレーショはその話を信じなかつたが、三晩目にマーセラスに連れられて高臺に行つた。噂は嘘ではなかつた。前ノルウェイ王と一騎討の戰ひに勝つた時その儘の甲冑姿の先王の亡靈は、ホレーショが言葉をかけても答はなかつた。する中に朝の牡鷄が啼き出したので、亡靈は急に觀界から消え去つた。

ホレーショの話はハムレットの好奇心を唆つた。彼はぜひ一度その父の亡靈に逢つてみたかつた。そして地獄が口を開いて默れと彼に命ずればとて、きつと話しかけてみようと思つた。

「何といふ不思議なことだ。」とハムレットは言つた。

「わが君、わたくしがかうして生きてゐることに疑ひのないと同じやうに、これはまつたく眞實のことでございます。」

「よし、今夜は予も見張りをいたさう。」

その夜は風が嚙みつくやうに吹いて、ひどい寒さだつた。十二時はもう過ぎてゐた。冴えわた

る月が、大空に高く懸つてゐた。喇叭の音と大砲の音が遠く聞えて來る。宮中では今しも徹宵の宴を張つてゐる最中である。王がラインの美酒を飲み干すごとに太鼓と喇叭を吹き鳴らして、人々はそこぬけ騒ぎに熱狂してゐる。これは他國人の誹謗の種となつてゐるこの國の古いならはしであつた。

する中に、いつもの時刻になると、亡靈が現はれた。ハムレットは恐ろしさに思はず身ぶるひした。亡靈は彼をさし招いた。ハムレット一人にのみ何かをうち明けようとしてゐるやうである。ホレーショや士官のマーセラスは、ハムレットを氣づかつて引きとめようとした。しかし昂奮したハムレットはそれを肯かうとはしなかつた。

「どこまで連れて行くのです。言つてください。もうこれ以上行けません。」

ハムレットは高臺の一部に出ると言つた。亡靈は立ち停つた。そして始めて口を切つた。

「ハムレットよ、よく聞け。わしが庭園で睡ろんでゐた時、毒蛇が來てわしを刺したと言つて、デンマルク中を欺いたことは、そちも知つてゐる通りだ。しかし、そちの父を刺した毒蛇は、今王冠を戴いてゐるぞ。」

ハムレットは息詰るばかりに驚いた。今の今までもしやと思つてゐたことが事實となつた。彼の豫感は慘酷にも彼を過らなかつた。のみならず、叔父は手に持つた毒液の瓶の口から、眠つてゐる父の耳に、その毒液を注ぎ込んだといふのである。のみならず、それが血管をかけめぐつてすぐに血液を凝りかためたといふのである。これは恐るべき陰謀であつた。父はこの叔父のため

に、その生命と、王冠と、王妃を一時に奪ひ取られたのだ。

「もしもそちに孝心あらば、必ずこの怨を晴らして貰ひたい。デンマーク王家の寢所は、色慾と怠はしい淫樂の床であつてはならぬ。ただ母に對して、たくらみをしようとは思ふな。母のことは、天に任せて、胸の中の棘針の刺すままにして置くがよい。ではさらばぢや。」

亡靈はハムレットを一人殘して消えて行つた。

ホレーショとマーセラスがハムレットを氣遣つて跡を追つて來た。

「どうなされました、わが君。」とマーセラスは言つた。

「どんなことがございました。」とホレーショは言つた。

ハムレットはかぶりを振つた。

「いや、そちたちは他に洩らすであらう。」

「天に誓つて口外いたしませぬ。」とホレーショが言つた。

「わたくしとて同樣でございます。」とマーセラスが言つた。

ハムレットは言つた。

「このデンマーク中に住んでゐる者で、極惡非道の惡人でない者はない。」

「それしきのことを亡靈が態々墓から出て、知らせるほどでもありますまい。」とホレーショは言つた。

「うむ、まつたくその通りだ。だから、もうこれ以上のことを詮索するのはやめて、お互に握手

して別れよう。誰にも仕事や欲望はあるものだから、そちたちはその仕事と欲望の指導するままにするがいい。予は予で歸つて祈禱でもしよう。」

「これはまたわが君には、取留めのないことを仰せられます。」とホレーショは驚いて言つた。

「氣を惡くしては相濟まん、心から。」

「惡くするなどと、決して。」

「いや、ある。惡いことがあるぞ、ホレーショ。恐ろしい惡いこともある。今の幻はほんものの亡靈であつたぞ。この亡靈と予の間に何があつたか、知りたくもあらうがこらへてくれ。そちたちは予の信友で、學者で、また武人だ。そこで一つ頼みたいことがある。」

「何事ですか、喜んで承りませう。」

「今宵見たことを一切他言してはならんぞ。」

「仰せまでもありませぬ。」とホレーショとマーセラスは同時に答へた。

ハムレットは言つた。

「予は心から感謝の意を以て、別れの挨拶をしよう。このハムレットは言ふに足らぬ凡夫だが、そちたちに對する友愛の情を示すために、神の許し給ふかぎり、誠意を缺くことはいたさぬ。さあ、一緒に城内へ入らう。いつまでも指を唇に當てて……ああ、この呪はれた運命、これを矯めるために、予が生れて來ようとは……」

三人は城内へはひつて行つた。

亂心

侍從長ポロニアスの息子レーアチーズは、即位式の參列を滯りなく濟まして、再びフランスに歸ることになつた。出立についての王の裁可もあつた。旅行の用具も船の積込みを終つた。ただ心に懸るのは、妹のオフィリアのことだけであつた。

ハムレットはオフィリアを愛してゐた。オフィリアもハムレットを恐らくは愛してゐるであらう。このことはポロニアスも知つてゐた。そして王も王妃も多分氣づいてゐるらしかつた。しかしハムレットの場合では、その結婚にはデンマーク國中の輿論の同意が必要であつた。レーアチーズはそのことを妹の耳に入れて置きたかつた。

「ハムレットさまのあの輕々しいそなたへの御寵愛だがね、あれは一時の氣まぐれだよ。若氣のさせるいたづらだよ。いはば春に生ひそだつ菫草さ。早咲きだがすぐに枯れる。美しいが長持ちはしない。それだけ。」

「たつたそれだけ。」

「それだけだと思ひなさい。恐れなければならぬことは、あの方の御自身の意志が、御自身のものではないことだ。あの方には輕い身分の者のやうに、氣儘な振舞は許されない。そのわけは、あの方の妃選び一つで、この國全體の安危にもかかはるからだ。萬が一にもあの方の口吟む小唄に輕々しく耳を傾げて、そなたの心を許したり、若氣にはやるせがみに負けて、大事な操の祕寶

を開きでもしようものならどうなる。それを異れなさい、オフィリア、愛情の殿（しんが）に身を置いて、欲望の的になる危険を避けることだよ。慎しみ深い處女（をとめ）は、月に素顔を曝すのさへ、はしたないことと思ふはずだ。淑德の權化でさへ、誹りの矢は免れぬぞ。害虫が春の若芽を蝕んで、蕾の花の開くのを待たぬことさへ珍らしくない。青春の水々しい露の朝は、惡い毒氣が押寄せがちだ。氣をつけなさい、最上の安全は畏れ慎しむことにある。若い時分は誰に誘はれるでもなく、われとわが身に叛くものだからな……」

話の中にポロニアスが出て來た。彼はすでに暇乞をしたレーアチーズがまだここにゐるのを見て言つた。

「まだここにゐるか、レーアチーズ。さあ、船だ、船だ。風は帆の肩に宿つて、みんながそちを待つてゐるぞ。」

「では、オフィリア、今言つたことをよく覺えてゐてくれ。」

レーアチーズは妹の側を離れた。オフィリアは言つた。

「記憶の倉に錠を下ろして、鍵は兄上にお預けして置きます。」

「さらばだ。」

レーアチーズはすぐに出て行つた。

「何だな、オフィリア、兄がそちに言つたことといふのは。」とポロニアスは訊いた。そしてそれがハムレットのことだと知ると、彼は續いて言つた。「若君との間は一體どうなのだ。ほんた

うのことを隱さずに言つてくれ。」

「父上、あの方は近ごろ幾度となく愛のお申出をなさいました。」

「愛だと。フゥ。まるでおぼこ娘だ。そちはその申出とやらを眞に受けてゐるのか。そんな極印つきでもない申出を、まことの拂込でも受けるやうに思ふなんて。自分をもつと高値に言ひ出しなさい。」

「でも、あの方には少しも不眞面目な風はございませんでした。」

「風だと。さうさう、當世風といふやつさ。馬鹿な、馬鹿な。」

「そして尊い誓言を、いろいろと仰やいました。」

「それ、それ、それが阿呆鳥を捕へるための罠（わな）だよ。血の燃える時には、何とでも誓の言葉がぺらぺらと出るものだからな。かういふ炎は、光の割に熱はない。ぱつと燃え上がるか上らぬうちに消えてしまふ。それを火と間違へては相ならん。これからは處女（をとめ）らしく、御前に出ることをさしひかへるがよいぞ。もしやお招ぎがあつたとしても、もつと自分に高値をつけて、會議の召集でも受けた時のやうに、急いで飛んでゆくことではない。たとへどんな喪服を着てござらうと、腹の中は大ちがひだと思ひなさい。信仰ぶつた口をきくのも、うまく人を欺さうための計略だ。今日以後、ハムレットさまと言葉を交したり、話したりすることは一切ならん。よいか、しかと申しつけたぞ。」

オフィリアは父の言葉に從つた。ハムレットからの手紙は受附けなかつた。面會も斷わつた。

ある日、オフィリアが自分の部屋で縫物をしてゐると、ハムレットがやつて來た。見れば上衣のボタンははづれ、帽子も着けず、汚れた靴下の留窪がとけて踝に足枷のやうに卷きつき、眞青な顏色をして、かの女の前にすつくと立つてゐた。彼は長い間まじろぎもせずに、かの女の顏を見入つてゐた。そしてかの女の腕を輕く振つて、三度頭を上げ下げすると、深い溜息を吐いた。それからかの女を放して、肩越しに頭をこちらへふりむけ、目を使はなくとも路がわかるやうに、戸の外へ出て行つた。

オフィリアからこの話を聞いたポロニアスは、ハムレットが戀のために亂心したのだと思はずにはゐられなかつた。彼は氣の毒なことをしたと思つた。もつと氣をつけ、よく判斷して、王子の樣子を見ればよかつたのに、一時の戯れで娘を弄ぶのではないかと疑つたのが抑々誤りであつた。自分位の齡になれば、先を見越して思ひすごしをする。それは若い者の無分別と同樣、老年者の缺點である。彼はさう考へた。彼はハムレットの亂心の次第を王に申述べるために、城内へと急いだ。

城内では今、ノルウェイから歸還した特使が、王に復命中であつた。デンマークと戰つて敗れた隣國ノルウェイの前王の子フォーチンブラスは、デンマーク王の他界を機會に復讐戰の計畫をひそかに進めてゐた。クローヂアスはフォーチンブラスの叔父のノルウェイ王に特使を派遣して、王の甥の野心を直ちに彈壓すべきことを要求した。病弱の床を離れ得ないノルウェイの老王は、驚いてフォーチンブラスを取調べた。フォーチンブラスは老王の命に服した。老王はよろこ

んで甥に年收三千クラウンの封土を與へ、すでに徵募した軍兵はポーランド征討に使ふことを許可した。

特使が報告を了へて去ると、ポロニアスは言つた。

「さて、わが君、並にお妃樣。そもそも王德とは何、忠勤とは何、なぜまた晝は晝、夜は夜、時は時であるかなどと解說いたすことは、夜と晝と時を徒らに費やすに過ぎませぬ。簡潔は智慧の魂、冗漫はその四肢、または枝葉である以上、わたくしは簡潔に申上げることにいたしませう。すなはち、王子樣には御狂氣にわたらせられます。わたくしは敢て狂氣と申します。何となれば、眞の狂氣を定義することは、實に狂そのものに外ならぬからでございます。しかし、それはどうでもよいと致しまして……」

王妃はたまりかねて叫んだ。

「もつと要點を。」

ポロニアスは首肯いた。

「お妃樣、誓つて申します。わたくしは嘘や詐りは申しません。王子樣の御狂氣はほんたうでございます。まことにはやお氣の毒と申上げるよりほかはございません。お氣の毒でもほんたうのことでございます。いや、下らぬ言葉の修飾は拔きといたしませう。で、まづ御狂氣と假定いたしまして、さて殘るところは、この結果の原因を搜すこと、それともむしろこの缺陷の原因と申しませうか。なぜと仰せられますると、この缺陷ある結果は、原因によつてまゐります。かう

して殘るところのものはかやうでございます。お聞きください。わたくしは一人の娘を持つてをります……と申しましても、あれがわたくしの手許にある間のことでございます……その娘めが從順の義務を重んじまして、これをわたくしに差出しました。どうかよく御推量ください。」

ポロニアスは手紙を取出して、讀みはじめた。

「ええと、(天上の佳人、わが魂のいつきまつる君、いとも美化されたるオフィリアの君へ)……これはまづい。(美化されたる)はまづい文句だ。だがまあその後をお聞きください。かうでございます。ええと、(御身の優れて白きみ胸にこれらの歌を)……」

「それをハムレットからオフィリアへ。」

王妃は遮つて訊いた。

ポロニアスは答へた。

「しばらく、お妃様、有體に申上げます……ええと、(星の光るを疑ひ、日輪のめぐるを疑ひ、眞理を虛僞と疑ふとも、ゆめわが戀を疑へそ……おお、いとしきオフィリアよ、予は韻をふむに拙し。さはれ御身を愛することのかくばかり深きを信じたまへ。さらば、いとも戀しき君よ、この彫假のわがものたらんかぎり御身のものなるハムレットより)……はいはい、娘は從順の心から、これをわたくしに示しました。尙ほこれに附け加へまして、あのお方様のいろいろとお言ひ寄りなされたこと、つまり、いつ、どこで、どんなであつたかを、殘らずわたくしの耳に入れましてございます。」

「で、オフィリアはその戀をどう受けた。」

王は焦々して訊いた。ポロニアスはずるさうににやにやして訊きかへした。

「わが君には手前をどうお考へになられますかな。」

「忠實な、名譽を重んずる者であらうが。」

「どうか左様な者であることを證據立てたいものでございます……もしもわたくしが机の抽斗や手帳のやうに、ぢつと目を瞑つて押默つたまま無言を守つてゐたり、またこの戀のいざこざを無頓着に放つて置いたりいたしましたならば、わが君にも、またここにいらせられるお妃様におかせられて、どうお考へ遊ばされるでございませう。いやいや、左様なことは決して致しませぬ。わたくしは早速娘にかう申しました。(ハムレット様は王子様ぢや。そちごときとは身分がちがふ。これはよろしくない)とな。それから王子様を避けて部屋に引籠ること、お使には逢はぬこと、御贈物も一切お受けいたさぬことを、しかと申附けました。娘はわたくしの言ひつけ通りにいたしました。そこで王子様は拒絶されて……手短かに申上げますが……憂鬱病にかからせられて、それからは御斷食、そして不眠症、そして御衰弱、そして御喪心、先づかやうな次第で、とどのつまりは只今の御狂氣とならせられ、われわれ一同の歎きとならせられたのでございます。」

「ふむ、そちもさう考へるか。」と王は王妃を顧て言つた。

「ありさうなことでございます。」と王妃が答へた。

「恐れながら、(これはかうでございます)と手前が申上げたことにつきまして、さうでなかつ

たことが、嘗て一度でもありましたらうか。」とポロニアスは得意げに言つた。

「いや、ない、ない。わしの知るかぎりではな。」と王はなだめるやうに言つた。

ポロニアスは昂然として己が顔を指した。

「今度のことにいたしましても、萬が一違ひましたら、早速これをおとりください。たとへ眞理がどこに隱れてゐませうとも、よしや大地のまつただ中に逃げ込みましても、必ず搜し出してお目にかける決心でございます。」

「ところでどうぢや。その實否をただす方法はあるまいかな。」と王妃は訊いた。

「ございます。王子樣には時々ここの廊下を御散歩なさいます。そこでわたくしは娘を王子樣の方に放ちませう。わが君とわたくしは、帳のうしろからその出逢ひを窺ひませう。萬が一娘を愛してゐられませず、そのための理性を失はせられたのでございませんでしたら、どうかわたくしの政務輔弼の任をお解きください。畑を買うて、馬追でも雇ひませう。」

恰度ハムレットが讀書しながらこちらにやつて來るところである。王と王妃は侍臣等を連れて姿をかくした。ポロニアスは待つた。そして近づいて來るハムレットに聲をかけた。

「御免ください。ハムレット樣にはいかが渡らせられますかな。」

ハムレットは答へた。

「おお、仕合せと丈夫ぢや。」

「わたくしを御存知ですか、若樣。」

「よう知つてゐる。そちは魚釣ぢや。」

「ではございませぬ、若樣。」

「すれば、あいつ位正直な男であつて欲しい。」

「正直者ですと。」

「さうだ。このやうな世に正直者で通すのは、萬人中の一人といふものだからな。」

ハムレットはうるささうに書物を讀みつづけた。ポロニアスは尙附き纏つて來た。ハムレットはポロニアスを振り向いて訊いた。

「そちは娘を持つてゐるか。」

「はい、持つてをります。」

「日中は歩かせぬがよいぞ。知識にふくらむのは結構だが、そちの娘のふくらむのは結構なことではない。氣を附けるがよいぞ。」

どうだ、あれは！ とポロニアスは思つた。やはり娘のことばかり言つてゐるではないか。最初わたしのことがわからないで、魚釣りだと言つた。よほど狂つてゐる。いや、ほんたうのことが、わしも若い時には戀のために甚しく惱んだものだ。恰度こんなものであつた。もう一度話しかけてみよう。

「若樣、何をお讀みですか。」

「言葉、言葉、言葉だよ。」

「何でございますつて。」
「誰と誰とだつて。」
「いえ、そのお讀みになつてゐらつしやることを伺ひますので。」
「惡口だよ、諷刺上手の惡黨がかう言つてゐる。老人は白い髯を生やし、顏は皺だらけ、兩眼からは濃い松脂を流す。そして智慧は恐しく缺乏し、膝ぶしは甚だ弱しとある。こんなことはわたしも信じきつてはゐるが、しかしかう書き立てるのは、あまり名譽なことぢやない。そちだつて蟹のやうに逆さに歩けば、やがてわし位の年輩にはなる。」
氣狂ひにしては、話の筋が立つてゐる！　とポロニアスは考へた。
「若樣、ちと大氣の外を御散歩なさいませんか。」
「墓のなかへでも行くのか。」
「若君、ではこれでお暇を取らせて頂きます。」
「そちがわしから取るもので、これほど喜んで上げたいと思ふものはない……尤もこの命は別だが。」
「御機嫌よう、若君。」
「うるさい馬鹿爺め。」
ポロニアスが去ると、ローゼンクランツとギルデンスターンがやつて來た。二人はハムレットの幼少の頃から一緒に教育を受け、彼の氣心もよくわかつてゐる間柄である。ハムレットが彼の

父の死以外に、何がかうまで自分を忘れしむるに至つたか、それさへわかれば治療の方法もあるといふ王と王妃の懇望から、ハムレットの精神を鑑定するためであつた。ハムレットは逸早く二人の姿を見掛けて聲をかけた。
「おお、わが親友。どうだ。ギルデンスターン。ああ、ローゼンクランツ。君たち、景氣はどうかな。」
「先づ世間並みといふところでございます。」とローゼンクランツは答へた。
「仕合せ過ぎないといふ意味で、仕合せでございます。」とギルデンスターンも答へた。
「何か珍聞でもないか。」とハムレットは訊いた。
「何もございません。世間が、だんだん正直になります位のもので。」とローゼンクランツが答へた。
「では、世の終りも近いな。一體君がたはどういふ咎があつて、牢獄へ送られたのだ。」
「牢獄と仰やいますと。」とギルデンスターンがまた訊いた。
「デンマークは牢獄だ。」
「デンマークが牢獄だとすれば、この世界も牢獄でせう。」とローゼンクランツが言つた。
ハムレットはうなづいた。
「立派な牢獄だよ。この世界には收監所も、獄室も、穴牢もあるが、デンマークはその最惡の一つだ。わしは近頃……なぜか自分にもわからないが、あらゆる歡樂を失ひ、武藝修行のならはし

も捨ててしまつた。憂鬱が重くわが胸にかさなつて、この地球といふ立派な構造も荒れはてた岬と見え、この空といふ美しい天蓋も醜く汚れた瘴氣の集合としか思はれない。人間は何といふ造花の傑作だらう。何といふ氣高い理性。何といふ無限の能力。姿といひ、振舞といひ、その表情にすぐれた點は驚嘆に値ひする。行ひは天使を欺き、智慧は神に似たこの人間。世界の美だ。生物の長だ。しかもわしにとつては塵埃に過ぎない。人は少しもわが心を樂しませない。いや、女とても同樣だ。そちたちはその微笑で、女ならばとほのめかすつもりらしいが。」

「いえ、左樣なことはわたくしの考へにはございません。」とローゼンクランツは慌てて言つた。

「では、わしが（人は少しもわが心を樂しませない）と言つた時、そちはなぜ笑つた。」

「もし人に樂みをお持ち遊ばされぬとすれば、あの俳優どもがどんなみじめな待遇をお受けするだらうと思ひまして。わたくしどもは道でかれらを追ひ越しましたが、かれらは御機嫌伺ひのため、こちらへまゐる途中でございました。」

「して、どんな役者だね。」

「以前御ひゐきになつた都の悲劇役者でございます。」

「かれらはどういふ機會で旅に出たのだ。評判の上から言つても、收入の上から言つても、都にゐた方がむしろよかつたのぢやなからうかな。」

「はい、それが近頃の流行に押されまして、都では興行が出來なくなつたやうでございます。」

「あれたちの評判はどうだ。予が都に居つた時分と變らないか。今でもあんなにもてはやされてゐるのか。」

「いいえ、實のところさうではないらしいのでございます。」

「さうか。それも必ずしも不思議ではない。近い話が予の叔父上のデンマーク王は、父上在世の頃とはちがつて來た。嘗て、叔父上を嘲笑つてゐた連中が、今では五十金、百金を惜しまないで、その小さな肖像畫を求めようとしてゐる。これには自然以上の何物かがある。ただ哲學が見出されないだけの話さ。」

華やかな喇叭の吹奏が聞えて、やがて數人の俳優があらはれて來た。

「俳優どもでございます。」とギルデンスターンは言つた。

ハムレットはふりかへつて腕をひろげた。

「ようこそ師匠だち。ようこそ、皆の者、達者で結構だな。早速何か一つ取り掛つて貰はう。さあ、そちたちの腕の冴えを見せてくれ。何か悲壯なところをな。」

「何んにいたしませうな」と俳優の一人が訊いた。

ハムレットは嘗て聞いたことのあるこの一座のトロイ王プライアムの死と、王妃ヘキューバの悲嘆の場面を思ひ出して、その一節の朗讀を求めた。

朗讀は申分なく出來た。城を出て猛火に包まれた街の中を群衆にもまれながら素足で馳け廻るヘキューバは、今日が日まで王冠を戴いたその頭に、僅かばかりの布片（きれ）をかむり、その腰のまはりには毛布を纏つてゐるだけである。ここまで演じて來ると、俳優の聲は嗄がれた。その眼から

は眞の涙さへ沸騰して來た。

「もうよろしい。」とハムレットは俳優に言つた。「殘りはまたあとでやつて貰はう。明日は芝居を見せて貰ひたい。時に師匠、(ゴンツァゴの虐殺)を演つて貰へるか。」

「はい、承知いたしました。」と俳優が答へた。

「では明晩演つてくれ。都合によつては臺詞を十五六行書き足すかも知れんが、それを諳誦して貰へるか。」

「はい、承知いたしました。」

ハムレットは獨りになると考へた。これは單に一つの作り話に過ぎない。それに俳優の顏色は青褪めて狂氣ばしり、身體のはたらきがその人になりきつてゐる。ヘキューバは彼にとつて何ならばかくは涙を流すのか。もしまた彼がおれのやうな大悲憤の動機と所緣を持つてゐるとしたら、それこそ舞臺を涙で溺らせ、身震ひするほどの臺詞で聽衆の耳をつんざき、罪ある者を狂亂せしめ、罪なき者を慄ひ上らせ、無知な者を狼狽せしめるにちがひない。ところでおれは何一つ言ひ得ない臆病者だ。現在殺された父の子たる者が、天堂も、地獄も、わが復讐を聲援してゐるのに、賣女のやうに口先だけで呪ひ罵るに過ぎない。聞けば罪を犯した者が芝居を見物中、場面の巧みにに魂を打たれて、即座に犯した罪を自白したといふ。殺人の罪に舌はなくとも、いつかは神秘な方法で語らせられる。あの俳優どもに命じ、父の殺害に類したことを仕組み、叔父の顏色に眼をつけて腹の底まで探つてみよう。もし少しでもたじろぐやうなことがあらば、取るべき

道はわかつてゐる……それともおれの見た亡靈は惡魔であるかも知れない。兎に角、もつと確かな根據が得たい。それには芝居こそ誂へ向だ。王の良心をこれでひつ捕へてやらう。

破れ鐘

生き存らふべきか、死ぬべきか、それが問題である……ハムレットは物思ひに耽りながら、城内の一室を歩いて來る。

殘酷な運命の石火矢を耐へ忍ぶのと、海なす艱難を迎へ、これと闘つてともに亡ぶのと、どちらが男子の心であらう。死は眠りに過ぎない。この心の惱みや、肉體の持つ千百の爭ひが、もし眠りによつて斷たれるならば、それこそ願ふべき大終焉なのだ……しかし、死は眠りだ。その眠りの中に、どんな夢を見るだらう。それを思ふと心が鈍る。われから永びかして生を貧るのも、そのために外ならない。さもなかつたら誰が我慢してゐよう。世の暴戾と嘲笑、壓制者の非道、驕慢な手合の輕蔑、顧みられない戀の惱み、裁判の長びき、官吏の横柄、または我慢强い立派な人が値ひなき者から受ける非禮などを、拔きはなつた短劍の一突きで清算出來るものなら……重荷を負うて憂き世の道を呻きながら汗水流して辿るのも、死後に來るあるものを恐れるからであり、嘗て旅人の歸つて來たことのない未知の國がわれらを心もとながらせるからである。現在の苦しみには耐へても、何とも解らない他の世界へ飛躍することを控へさせるのはこのためだ。內省はわれらを悉く臆病者にする。かうして決心の凜々しい色彩も、懸念といふ青褪めた色に塗り

替へられ、大事の計畫はその進行を沮まれて、あたら實行の名を失ふことになる……

彼はふとオフィリアの姿に氣づいた。オフィリアは今しも祈禱書を讀み耽つてゐるらしい。彼は側近く寄つて行つて聲をかけた。

「おお、美しいオフィリア。森の女神よ。祈禱のうちにわがすべての罪の消滅も祈りそへておくれ。」

オフィリアは彼をふりむいた。

「王子様、近頃御機嫌はいかがでゐらせられますか。」

「いや、有難う。達者ぢや、達者ぢや。」

「わたくし王子様からいろいろ頂戴物をしてをりますが、それをお返へし申したいと存じまして。どうぞお受取りくださいまし。」

「いや、何もやつた覺えはない。」

「まあ、王子様、そのやうなことを仰やつて。それと御一緒に、それはそれは美しいお言葉をお添へくださいましたので、お品は一層輝かしくなりましたが、今ではその香も失せました。どうぞお納めくださいまし。さもしい心でない以上、どんな立派な贈物でも、贈つた方の眞心が添うてゐたければ、つまらぬものになります。さあ、王子様。」

ハムレットは突然笑ひ出した。

「ハハハハ。そなたは貞女か。」

「え?」

「美人かい。」

「どうしてまあそのやうなことを。」

「貞女で美人なら、その貞女と美人を親しくさせぬがよい。」

「美人と貞女なら、恰度よいお友達ではございませんか。」

「とんでもない。なぜといふなら、美しさが操を墮す力は強いものだが、美しさを引上げる操の力は、とても弱いものだよ。そんなことは昔は異說に過ぎなかつたのだが、今ではそれが普通のことになつてゐる……以前はそなたを愛したこともあつた。」

「わたくしもさう信じてをりました。」

「わしの言ふことなどを、信ずるのではなかつたよ。德はどんなに接木しようとも、やつぱり古株の匂ひがするからな。愛してなどはゐなかつたよ。」

「それはきつい思ひ違ひでございました。」

「尼寺へ行きなさい。どうして罪な人間を養ひ育てようとするのかな。おれなどは可なり正直者だが、それでも母が產んでくれなかつたらと悲んでゐるのだ。おれといふ男は、ひどく高慢で、復讐心强く、野心がいつぱいで、自分が許しさへすれば、どんな罪科も犯しかねない。こんな男が天地の間を這ひずり廻つて、何をするものか。われわれは一人殘らず惡黨だ。誰をも信じてはならない。さつさと尼寺へ行きなさい。」

彼はふと、帳のうしろに誰かゐるらしい氣配に氣づいた。

「父上はどこにゐる。」

「あの、宅にをります。」

「ぴつたり戸の中に閉ぢ込めて、自分の家でもないところで、馬鹿な眞似はさせぬがよいぞ。さようなら。」

「おお、天の神々、この王子をお助けくださいまし。」

一旦去りかけたハムレットは、また戻つて來た。

「もしも結婚するなら、お祝ひの代りにこの呪詛を與へよう……たとへそなたが氷のやうに操正しく、雪のやうに純潔であらうとも、世間の誹りは免れまいぞ。尼寺へ行きなさい、尼寺へ。さやうなら。」

彼はすぐにまた引かへした。

「それとも、どうあつても結婚したいなら、馬鹿者と結婚なさい。賢い男だと、そなたのふしだらにぢきに感づいて、角を生やして騒ぎ立てるばかりだからな。尼寺へ行きなさい、ぐづぐづしてゐるのではないよ。ではさやうなら。」

「おお、天の神々、どうぞあの方を正氣に取戻してくださいまし。」

「そなただちが紅白粉を塗ることもよく聞いてゐる。神から與へられた顏を、自分で別のものにするのだ。しなを作つて小刻みに歩く。舌たるくする。神の創造物に諢名をつける。そしらぬ顏

をして、みだらな嬌態をする。べつ。もう我慢が出來ん。おれはそれで氣が狂つたのだ。よいか、もう結婚はさせぬぞ。既に結婚した者は一人だけ許して、ほかの者は今の未婚の儘で一生を送らせる。さあ尼寺へ、尼寺へ。」

ハムレットは急に立ち去つた。

オフィリアはその跡を見送つてゐる中に、涙が込み上げて來た。ああ、けだかいお心が何といふ破滅であらう。貴紳の眼。博學の舌。武人の劍。美しい御國の花とも、未來の力とも、覗る眼ある人から崇められてゐたのに、今はもう空しくなつてしまつた。女子の中で誰よりも慘めなのはこの自分だ。嘗ては音樂のやうな誓ひの蜜を吸うた身が、今では破鐘のやうに調子はづれて鳴り騒ぐのを聞いてゐる。咲き誇る青春のたぐひなきお姿は、狂亂の嵐の中に散つて行つた。あゝ、何といふ因果だらう。昔を見た目が今日の今を見るとは！

草を待つ馬

城内の大廣間にデンマーク行進曲が劇喨と聞えて來た。王と王妃はポロニアスやオフィリアや廷臣たちを從へて、今觀劇のためにやつて來た。

芝居の筋はヴィーンの大公の虐殺を仕組んだものであつた。大公は名をゴンツァゴといひ、王妃はバプチスタといつた。大公の甥ルシアヌスは、城中の花園で彼を毒殺して、すぐにまた彼の妻を盜みとつた。先王ハムレットの最後に酷似したこの劇が、王クローヂアスを試めさうとする

王子ハムレットの深い思慮があらうとは、王自身知らなかつた。ハムレットの亂心が、かうした娯樂によつて氣を轉ずるよすがともならばと王は思つた。

「ハムレット、工合はどうかな。」

王はハムレットに聲をかけた。ハムレットは答へた。

「結構です、まつたく。カミーリョンの料理同樣、空氣を食つてゐます、空約束で詰込まれて。」

「こんな答を受けるやうな問ひはしないつもりだ。その言葉は予へのものぢやない。」

「と言つて、わたしのものでもありませんよ、今となつては。ポロニアス、御身は昔大學で芝居をしたと言つたな。」

「いたしました。」とポロニアスは答へた。

「何を演じた。」

「ジュリアス・シーザーに扮して、議事堂で殺されました。ブルータスがわたしをやつつけました。」

「何、噛みとると。噛みとるなんて、ブルータスも隨分蠻的だな。」

幕が開きさうである。王妃はハムレットを自分の傍に招いた。するとハムレットは、こつちの方にもつと引力があると言つて、オフィリアの方へ行つた。そしてオフィリアの脚の近くに横になつた。

「姫、御裳裾をちよつと貸してくれよ。」

「飛んでもない。」

「ちよつと頭を裳裾へのせるだけさ。」

「ではどうぞ。」

「田舍びたことでもすると思つたか。」

「いいえ、何とも思ひませぬ。」

「處女の脚の間に横になるなんて、いい思ひつきだよ。」

「何を仰せられます。」

「何でもないさ。」

「浮き浮きしていらつしやいますこと。」

「誰が、予が。」

「さやうでございます。」

「一體人間はこんな時浮かれないで、何としよう。それ、御覽。母上の樂しさうな御樣子と言つたら。父上がなくなられてからほんの二時間だのにな。」

「いいえ、もう二月の上にもなりますよ。」

「そんなに經つかな。それなら黑服は惡魔に着せるがいい。おお天の神々。死んで二月も經つのにまだ忘れられない。すると權勢家の記憶も、死後半年は續く望みがあるね。しかし敎會でも建てなかつたら、人間は木馬になる。その碑文はかうだ。(なぜなら、おお、なぜなら、木馬は忘

れてしまつた……)」

木笛(オーボー)が聞えて、默劇の俳優が出て來た。

王は妃を、妃は王を瞠まじげに抱擁する。妃は王を花咲き亂れた堤の上に臥させ、熟睡するのを見て立ち去る。やがて一の頸にもたせる。妃は王を花咲き亂れた堤の上に臥させ、熟睡するのを見て立ち去る。やがて一人の男がはひつて來る。王冠を奪ひ取つて、これに口づけし、王の耳に毒を注入して退く。妃歸つて來て王の死んだのを見て、激しい悲嘆のこなしがある。毒害者は二三の者を伴ひ、再びはひつて來て、妃とともに哀悼するこなしがある。死體は運び去られる。毒害者はさまざまな贈物を以て、妃に求婚する。妃は憎み嫌ひ、肯んじない。しかし結局、彼の戀を受ける。一同退場する。その後から序詞役が登場した。

「わら等並びにわれ等の悲劇のため、皆さま方の御愛顧をと、ここに腰を屈めて、御靜聽を願ひ奉りまする。」

序詞役はかう言ふと立ち去つた。

「これが序詞か、それとも指輪の銘か。」とハムレットは言つた。

「ほんたうに短かうございますこと。」オフィリアが言つた。

「女の戀のやうにな。」ハムレットは母の方をちらと見て、にやりとした。

王と王妃に扮した二人の俳優がまた出て來た。劇中の王は言つた。

「婚姻の神われらの手を結びて聖き固めとせし日より、日の神の車は世界のまはりを廻ること、はや三十を十二たび巡り。」

續いて劇中の妃は言つた。

「悲しや、わが君には近頃病を患はせられ、氣力も萎えて、もとのおん姿もなし。されどかまへて御心をな惱ましたまへそ。女子の愛と憂ひとは、ともに等しきものなれば、愛大いなれば憂ひとなり、憂ひ大いなれば愛こそ生れむ。」

「まことやわれ、御身を殘して程もなくこの世を去りぬべし。御身はこの美はしき世に生き存らへ、人には敬れ愛せられて、もし賴もしき人あらば、御身の後の良人ともして……」

「おお、忌はしきその言葉かな。假りにも二度の夫持たば、呪ひよこの身に來れかし。初めの良人を殺すほどの女子ならでは、重ねて夫を迎へまじ。後の良人の閨の口づけは、先夫を重ねて殺すにも等しからむ。」

「われ固く信ず、口にしたまふごとく、心に思ひたまふことを。さはれかりそめならぬ決意とも、しばしば破るはわれらのならひなり。今こそ生々しき果實のごとく元木に着けばとて、果熟すれば搖り動かさざれども落つ。情に激して誓へたることは、情の消ゆるとともに消え失せむ。げに御身は今、またの良人にまみえじとこそ思ふらめ、最初の良人の亡かりせば、御身の思ひも亡かるべし。」

「地は食を、天は光を與へざれ。晝は樂しみを、夜は休みを鎖ざせかし。もしわれ寡婦ともなりて、重ねて妻となることあらば。」

「深くも誓ひたまへり。妃よ、われ心うみたれば、しばし眠りてこの物憂き日をまぎらはさむ。」
「眠りよ、來りてわが君の御頭を休ませ奉れ。ゆめ災厄よ、來らざれ。」
劇中王は眠つた。劇中妃はそれを見屆けて、やがて立ち去つた。
「母上、芝居はお氣に召しましたか。」とハムレットはゲルトルードに訊いた。
「妃が、ちと言ひ過ぎますね。」とゲルトルードは答へた。
「しかし、自分で言つたことだけは守るでせう。」
「外題は何といふかな。」と王は訊いた。
「鼠とりと申します。この劇はヴィーンで行はれた殺人事件をその儘仕組んだのです。恐ろしい惡だくみです。しかし、お上にしても、われわれにしても、心に痛いところがなければ、何の關りもないはずです。」
ルシアナスが出て來た。ハムレットは指して言つた。
「あれがルシアナスです。ゴンツァゴ大公の甥です。」
「恰度說明役のやうに、何も彼も御存じでいらつしやいますね。」とオフィリアは笑つた。
「知つてゐるとも。そなたとそなたの愛人の間柄でも說明出來る。操人形のいちやついてゐるところを見せて貰へばね。」
「ほんたうに鋭いお口ですこと。」
「鋭いわたしの鋒先を鈍くさせるには、一唸りせずばなるまいて。」

「まあ、だんだんいけなくなりますわ。」
「さう言つて良人を迎へなきやね。」
舞臺ではルシアナスが芝居にかかつた。ルシアナスの奏詞が聞える。
「心は黑く腕は牙え、毒藥整ひ折も首尾。時機も味方となりたるか、ほかに見る者とてもなし。眞夜中の毒草より搾き集め、魔女の呪詛に呪はれて、毒氣に三たび染めたれば、その恐ろしき天然の魔力もて、健やかなる肉體を奪ひとれ。」
ルシアナスはさう言ひながら、眠つてゐるゴンツァゴ王の耳に手に持つた毒液を注ぎ込んだ。
ハムレットは言つた。
「あの男は王を毒害して、王位を奪はうとするのだ。王の名はゴンツァゴ。この話は今も殘つて、選りぬきのイタリア語で書かれてゐる。人殺しがゴンツァゴの妃をどうたぶらかして手に入れるか、今にわかる。」
「お上のお起ちでございます。」とオフィリアは驚いて叫んだ。
「何、嘘の烽火に驚いたのか。」
「お上、どうなされました。」と王妃が王を呼んだ。
「芝居を止めい、芝居を。」とポロニアスは叫んだ。
「燭火を持て。下れ。」と王は吐鳴つた。
そして王はよろめきながら座席を立上つた。

「燭火(あかり)……燭火……」

一同は口々に叫びながら、王を取圍んで出て行つた。

ハムレットはホレーショとただ二人で殘つてゐた。ハムレットはたまらなく陽氣になつた。彼は小躍りした。

「おお、ホレーショ、亡靈の言葉を千ポンドで買はうよ。そちは見たか。」

「よく見ました。」

「霹靂の臺詞になつた時に。」

「確かに見屆けました。」

「アハ。さあ音樂だ。さあ笛、笛！」

ローゼンクランツとギルデンスターンが出て來た。ギルデンスターンが言つた。

「わが君、一言申上げたうございます。」

「一言どころか、一卷でも。」

「御上には。」

「御上が何となされた。」

「御退出後いたく御不快に渡らせられます。」

「お醉ひになられてか。」

「いえ、御不興で。」

「これは侍醫に知らせたがよい。なまじ予が下劑でもかけようなら、益々御不興を增すばかりだ。」

「わが君、お言葉を少しく秩序正しく遊ばされ、用件から離れぬやう願ひます。」

「よし。さあ言へ。」

「御妃にはいたく御心を惱まされ、われわれ兩人をお迎へに遣はされました。」

「ようこそ來られた。」

「いえ、わが君、御本心の御返辭を賜はりまするならば、御妃に仰せを傳へまする。さもなくば退出を願ひたいのでございます。」

「それは予には出來ない。」

「何がでございますか。」

「健全な返辭をすることがさ。予の頭は不健全になつてゐる。だが予のなし能ふかぎりの返辭なら、母上が……」

ローゼンクランツが遮つて言つた。

「わが君今夕の御振舞には、いたくお驚きになられまして……」

「おお驚くべき息子だ。母をかくまでお驚かし申すとは。だが、驚きの後の餘談といふやうなものはないかな。」

「御寢になる前に、お居間でおさし向ひのお話を遊ばしたいとの御意にございます。」

「承つた。母上が十倍の母上であつたほどにも仰せに從ひますと言へ。ほかに何か取引はないか。」

ローゼンクランツは聲を變へて徐ろに言つた。

「わが君には、かねてわたくしに友愛の情を賜はりましたが……」

「今でもだよ、このもろ手にかけて。」

「では伺ひますが、わが君御憂鬱の原因は抑々何でございませうか。假りにも友人と仰せられながらお包みあるは、それこそ御自身の自由に向つて、戸を閉めるやうなものでございます。」

「實は世世が出來ないからだよ。」

「どうしてそんなことがありませう。デンマークの王位御繼承については、現に御上御自身のお言葉さへございますのに。」

ローゼンクランツはハムレットの心得違ひを論しでもするやうに熱心に言つた。ローゼンクランツの顏をまじまじと見詰めてゐたハムレットは、急に視線を轉じた。そして半ば自分を憐れむやうに、また半ば嘲るやうに、聲を落して言つた。

「草が伸びるのを待つてゐるうちに、馬は飢ゑ死にするよ……古い諺だがね……」

垂帳のかげ

クローディアス王はローゼンクランツとギルデンスターンの二人に、イギリス行の命令を傳へた。

刻々に募りゆくハムレットの狂態を、王はその儘にうち棄てて置くことは出來なかつた。國のためを思ふなら、彼を忍ぶわけには行かない。これが王の言前であつた。その彼を二人に伴はせてイギリスに遣はさうと、彼は決心した。ハムレットは今ではあまり自由に歩き過ぎてゐる。この危なつかしい者に足枷をはめることは、彼にとつて必要であつた。

ギルデンスターンはこの王の命令が、御綾威の下に生きる民草の安寧を御心にかけさせられるいとも神聖な神の道だと言つた。またローゼンクランツは王を高い山の頂に置かれた車輪に譬へて、その一たび轉落するや、一切の小さな附屬物を茫然たる破滅に導くに等しいと言つた。二人は甘言令色の王の最愛の寵臣であつた。そして當代デンマークの世相の代表者であつた。虛僞と、阿諂と、罪惡の權化は侍從長ポロニアスばかりではなかつた。

二人が去ると、入りちがひにポロニアスがはひつて來た。彼は今ハムレットが王妃の室へ行つたことを告げた。そして言つた。

「わたくしは帳のかげにかくれて、お話の次第をお聞き取りいたしませう。必ず御妃には王子様を十分御糺明なされることでせうが、母と子の御間柄では兎角情にこだわり過ぎて軌道を逸しがちなものでございますから、ほかに誰か聽き手がゐて、お話の模樣をお立ち聽きすることは、極めて必要なことと存じます。ではお暇申上げます。尙ほ御寢前にまた罷り出まして、委細申上げることにいたします。」

立ち去るポロニアスをぢつと見送つてゐた王は、やがて一人になると、長い長い溜息を吐いた。

おお、極惡無類のわが罪、その惡臭は天にも屆く。人類最初の、また最古の呪詛がかかつてゐる。兄殺しの呪ひだ。祈らうにも祈られない、祈りたいといふ願ひは、心の底から湧き起るのだが。もしもこの呪はれた手が、手の厚みよりもつと厚く、兄の血潮で塗られてゐたらどうであらう。美はしい天の雨を傾け盡しても、これを洗つて雪とすることは出來ないであらうか。祈りの功德は一體何だ。墮落に先立つて、未然にわれわれを導くか、乃至は陷つたものに赦免を與へるか。この二つのほかはない。しかしどういふ形式の祈りが、予のこの場合に役立つか。（わが惡惡の毒害を許させたまへ）と言はうか。いや、いや、これでよからう筈はない。現に予は殺害して、獲得したものをやはり占有してゐる。わが王冠、わが野心の實現、そしてまたわが妃。罪の利得だけは保留して、罪だけ許されることが出來ようか。天上の法廷では黑白の混淆なく、行うたことはありの儘の姿で横はつてゐる。われわれは罪科の面皮をさらして、證據を提供しなければならぬ。ではどうしようか。出來るだけ懺悔をしてみよう。懺悔はいかなる罪をも赦すであらうか。しかし人が懺悔し得る時に懺悔に何の甲斐があらう。おお、淺間しい。おお、黃泉の圖に似たこの胸。自由にならうともがけばもがくほど餘計に絡まる。助けてください、天の御使！跪け、頑固な膝よ、鋼鐵の筋のはひつた心臟よ、生れた儘のみどり兒の肉のやうに軟かになりを

王は跪いて熟心に祈つた。

ハムレットが出て來た。彼は今こそ好時機だと思つて、劍に手を掛けた。しかし、祈りの最中に彼を殺すとしたら、彼を天國に追ひやるだけだ。劍よ、もつと好い機會の到來する時を待て。彼が亂醉して眠る時、怒り猛ける時、または閨房で邪婬を肆（ほしいまま）にしてゐる時、賭博に耽るか、惡口雜言するか、到底救ひの望みなき行爲のまつ眞中に彼を蹴落さば、彼の踵（かかと）は天を蹴つて、魂は暗黑の地獄へと落ち行くであらう……母上がお待ちかねだ。この醫術はお前の病の日を長びかせるに過ぎないぞ。

ハムレットは思ひかへして、妃の室へと驅け去つた。

足音を聞いた時、ポロニアスは急いで垂帳のかげに隱れた。

「母上　…母上……」

ハムレットの聲がして、やがて彼はその姿を現はした。

「母上、何ぞ御用でございますか。」

ゲルトルードは振りかへつて、わが子を見た。かの女の顏はいつになく剛ばつてゐた。かの女は言つた。

「ハムレット、そなたは父上に對して、ひどい無禮をいたしましたな。」

その聲は慄れてゐた。

「母上、あなたはわたくしの父上に對して、ひどい無禮をいたされましたな。」

ハムレットは態と母の口調を眞似て言つた。これは王妃を激昂させた。

「これ、これ、そなたは返辭をするに、わけもない口の利きやうをするのですか。」
「それ、それ、あなたは道にそれた訊ね方をなされるのですか。」
「まあ、一體どうしたといふのです、ハムレット！」
王妃は堪りかねて金切聲を出した。
「母上こそどうしたといふのです。」
ハムレットは相變らず人を小馬鹿にしたやうな口の利き方をした。
「そなたはわたしを忘れたのか。」
王妃の聲は半ば泣いてゐた。
「いいえ、十字架にかけて忘れませぬ。あなたは御妃です、あなたの良人の弟の御妃です。そして……さうでなければいいのだが……あなたはわたしの母上です。」
「何ですと。それならわたしはそなたと話の出來る者に渡しますぞ。」
王妃はもうまつたく肯視めてゐた。かの女は立ち上つて誰かを呼ばうとした。
ハムレットは逸早くかの女の前に立ち塞がつた。
「まあ坐つてお出でなさい。動いてはなりませぬ。起たずにわたしの置く鏡を御覽なさい。その中にあなたの心の底まで映るでせう。」
「何をしやる。わたしを殺さうとするのではないか。誰か來て助けて、助けて！」
王妃は夢中になつて悲鳴を放つた。垂帳が搖いだ。そして驚いて喚き立てるポロニアスの聲

が、その中から聞こえて來た。
「やあ誰か。助けい、助けい！」
「何、鼠か。くたばりをれ！」
ハムレットは劍を抜くより早く、垂帳越しに烈しく突込んだ。
「おお、やられた！」
垂帳のかげからポロニアスのけたたましい聲が起つた。
「おお恐ろしい。何をしやつたか。」と王妃は聲を喘ませて言つた。
「いや、わたしは知らぬ。今のは王ですか。」
「おお、何といふ性急な。むごたらしい行ひを。」
「何、むごたらしい行ひですと。母上、王を殺害して、その弟と結婚するのに比べたら。似たり寄つたりです。」
「何、王を殺害して。」
「さうです、さう申しました。」
ハムレットは垂帳をかかげた。見るとそこにはポロニアスが死んでゐた。彼は忌はしげに言つた。
「淺間しい、輕はずみな、出過ぎた馬鹿者、さらばだ。わたしはお前の目上の者かと思つた。おせつかいをすると危いことが、これでわかつたらう。母上、御手を握るのはおやめなさい。ま

あ靜かに。お掛けなさい。」

「わたしが何をしたといふので、つべこべとそんな亂暴な口を利くのだらう。」

「何をしたとは母上、あなたの行ひは夫婦の固めから魂を拔き取つて、尊い宗教をも言葉ばかりの法螺貝交にするのです。天の顏もこれを見ては赤くなり、この堅い大地も悲しげに面をひそめて、世界の最後の日が迫つたかと思ひ惱むほどの御所行です。」

「ああ、その所行とは一體何だらう。あたまからそんな大聲で怒鳴り散らすとは。」

「御覽なさい、この繪姿と、それからこれを。これは二人の兄弟の肖像です。どうです、その眉の上にやどつてゐる氣高さ。これがあなたの前の良人でした。そしてこれがあなたの今の良人です。麥の黑穗のやうに、健やかな兄の穗を枯らしてしまひました。あなたに眼がありますか。あらばどうしてこの美しい高峰から、こんな泥沼に下りたのです。これでもあなたには眼がありますか。いいえ、戀とは言はせん。あなた位の年になれば、穩やかに物事の分別があつて然るべきに、どうしてこれからこれへと移られたのです。いかなる惡魔が魅入つて、かくもあなたを欺き、眼かくしをしたのでせう。兩眼あらば感情はなくとも、感情あらば視力はなくとも、耳あらば手や眼はなくとも、鼻さへあらば何はなくとも、それとも狂つた感覺のただ一つさへあるなら、かうまで老けはすまいに。おお羞恥心よ、汝の赤面はどこにある。」

「おお、ハムレット、もう止めておくれ。そなたはわたしにこの魂の黑く浸込んだ汚點を見せてくれました……」

ハムレットは空を見詰めてゐる。彼にのみ見える父の亡靈が今しも現はれたのだ。ハムレットは叫んだ。

「おお天の守りの御使、御翼をひろげてわが上を覆はせたまへ。尊き御姿はそも何を求めたまふのですか。」

「ああ、心が狂うたか。」

王妃は恐怖の中で怒鳴つた。

ハムレットは空を見詰めて更に言つた。

「あなたの怠慢な不肖の兒をお責めにならないでください。ただ情にのみ激しく時を空費し、御嚴命の大事を遷延してをります。」

亡靈の聲がハムレットにのみ聞えた。

「忘れてはならぬぞ、今宵の出現はそちの鈍つた決心に磨ぎをかけんがためだ。しかしあれを見よ、そちの母は驚きのあまり恐れ惑うてゐる。母を慰めてやれ、ハムレット。」

「母上、どうなされました。」とハムレットは母に優しく言葉をかけた。

王妃は答へた。

「ああ、そなたこそどうしたのです。何も見えない空を見詰めて、形のない空氣と何か語つてゐる。その眼には魂が物狂はしげにのぞき出てゐる。その垂れ下すつた髮は、睡眠中の兵士が不意の喇叭に襲はれたやうに、起き上つて逆立ちしてゐる。おお、いとしいわが兒よ、そなたの怒り

の熱と炎の上に冷たい忍耐を注いでおくれ。どこをそなたは見てゐるのです。」

「あれ、あれを御覽なさい。青白い顏をして睨めつけてをられます。あのお姿とあのお怨みとが合されば、石に說法してもこれを有情のものとしませう……わたしを見ないでください。そのやうないぢらしいお振舞をなされると、わたしの堅い決心も鈍つてしまひます。そしてわたしのせねばならぬことも、まことの色を失ひます。恐らく血の代りに涙を流すやうになりませう。」

「そなたは誰に話してゐるのです。」

「母上には何も見えませんか。」

「いいえ、なんにも。」

「何も聽こえませんか。」

「いいえ、二人の言葉以外には。」

「さあ、あすこを御覽なさい。そら、忍び足に去つてゆく。わたしの父上、ありし日のまゝの御裝束で。そら行かれます。丁度今、戸の外へ。」

亡靈は遂に行つてしまつた。

王妃はなだめるやうにやさしく言つた。

「これはそなたの腦のこしらへものだよ。心の亂れた折には、こんな形のない物をつくり出すものだから。」

「心が亂れてゐますと。いいえ、わたしの脈はあなたのと同樣、やすらかに搏つてゐます。母

上、後世を顧ふお心があらば、あなたの魂に都合のよい塗劑をして、わたしの亂心が言はせたのだと誤魔化してはなりません。神樣に懺悔をなさい。過去を悔ひ、未來を慎しみ、雜草の上に肥料を撒きかけるやうに、惡臭を一層募らせてはなりません。」

「おお、ハムレット、そなたはわたしの胸を眞つ二つにしてしまひました。」

「その片々の惡い方を投げ棄てて、他の善い方で潔い餘生を送つてください。お寢みなさい。しかし叔父上の寢所へはお出でにならないで。たとへ操はなくとも、一つ一つこれを積む修業をなさい。今夜はお愼しみなさい。さうすれば次ぎの夜は容易くなり、そのまた次ぎの夜は一層容易くなります。あらはしは殆んど本性を變へ、不思議な力を以てその惡魔を征服することが出來ます。では改めてお寢みなさい。祝福を祈る心が起りました節は、わたくしも祝福を祈り添へませう……この老人は不愍なことをした。しかしこれとても天の意志、これを以て予を罰し、予を以てこれを罰し、予が天に代つてその答とならなければならなかつた。死假を片づけ、予が彼に與へた死については、十分に責を負ふことにしよう……では重ねて、お寢みなさい。かう殘酷にしなければならなかつたのも、爲めを思ふからばかりです。不吉に事は始まつたが、更に大きな不吉が後に殘つてゐる。母上、今一言。」

「何をせよといふのです。」

「わたしがなさいと申したことは、一切棄てて御自由になさいまし。あの寄ぶくれの王から、寢床へ誘はれるままになさい。頰をつねられたり、(わしの小鼠)などと呼ばれたり、脂臭い口づけ

や、汚らしい手で頸を抱きしめられたりしたら、何も彼もお打ち明けなさいまし。あれは本當の亂心ではなく、ほんの計略の氣狂だと、かう言つておしまひなさい。」

「安心しておくれ、もし言葉は呼吸で出來、呼吸は生命で出來てゐるものなら、わたしはそなたの言つたことをうち明ける呼吸も生命も持たないよ。」

ハムレットはイギリスへ行かなければならないことを思ひ出した。國書はすでに封印された。齒のある毒蛇と思つてゐる彼の二人の學友が露拂ひである。自分がしかけた地雷火で、自分が打上げられたのを見るのも一興だと、ハムレットは嘲笑つて、ポロニアスの死骸を曳き摺り出した。生前おしやべりな愚か者であつたが、今ではまつたく靜肅だ。祕密を洩らしもしなければ、生眞面目でもある。さあお前の始末をつけてやらう……お寢みなさい、母上。

夕食中

慌しくはいつて來た王妃から、ポロニアスが殺されたことを知つた王は、恐怖と驚きに壓倒された。

かうした人物を打棄て置くことは、危險この上もない。王はかう考へた。とはいへ、彼を嚴格な法に問ふわけにも行かない。そのわけは、彼が辨へのない愚民どもに愛されてゐるからである。一刻も早く彼をイギリスへ追出さう。王の決心は固かつた。

「ハムレット、ポロニアスはどこにゐる。」

王ははひつて來たハムレットに訊いた。

「夕食中です。」とハムレットは簡單に答へた。

「夕食中だと。何處で。」

「自分が食つてゐるのではなく、食はれてゐるんです。政治家氣取りの蛆蟲が寄り集まつて、今宴會を開いてゐます。あの蛆蟲といふ奴は宴席の帝王です。われわれはわれわれを肥らせるために、われわれ以外の生物を肥らせます。肥えた王も痩せた乞食も、結局は目先の變つた料理で、同じ食卓へ出す二つの皿です。それでおしまひです。」

「ああ、ああ。」

「人間は王を喰つた蛆蟲で魚を釣り、その蛆蟲を養分にした魚を食ふこともあり得るのです。」

「それはどういふ意味か。」

「何でもありません、王でも乞食の胃の腑を通つて巡幸することがあるといふことを、お知らせするだけです。」

「ポロニアスはどこにゐると言つたな。」

「天國に人をやつて探させなさい。もしその使が見つけなかつたら、御自身で地獄を探すんですね。しかし月の内に見つけなかつたら、ぷんと來ませうよ。」

「ハムレット、そちのこの度の所業については、われら切にこれを悲しむものであるが、そち一身の安全を計るため、火急にこの國よりそちを送り出すことに決心した。船の支度は出來たし、

風向はよし、隨行の者も揃つて、萬端の準備はイギリスを指してゐる。」

「イギリスへ。」

「さうだ、ハムレット。」

「承知しました。」

「さう言ふべきである。われらの志のあるところをそちが知つてくれたら。」

「どういふ志か、天使は見通しだ。さあ、イギリスへ、さらば親しき母上。」

「そちの愛する父にも。」

「いいえ、母上にです。父と母とは夫婦、良人と妻は同心一體。わたしの母上、さらばです。さあ、イギリスへ。」

ハムレットは父の前を馳け去つた。

ローゼンクランツとギルデンスターンを連れて、イギリスへ渡るために港へゆく途中、デンマークの平野にかかつたハムレットは、一隊の外國兵が進軍して來るのに逢つた。

「これはどこの軍隊か。」とハムレットは訊いた。

近づいて來た隊長が答へた。

「ノルウェイ軍であります。」

「どういふ目的か。」

「ポーランドの一部を攻撃のためであります。」

「指揮官は。」

「老ノルウェー王の甥御フォーチンブラス殿であります。」

「ポーランド全部を攻撃するのか、それともその邊境だけか。」

「掛値なしに申しますと、自分どもの獲ようとするのは、ほんの補綴布(つぎはぎ)ほどの土地で、實はたつた五ダカットの借地料を拂つても、借りたくない位の土地です。それをまた賣拂つたところで、ノルウェイの手にしろ、ポーランドの手にしろ、それ以上の金ははいりますまい。」

「すると、ポーランド人だつて防戰しようとはすまい。」

「ところが、もはや守備は出來てゐます。」

「二千の人命と二萬ダカットの軍費とを以て、藁屑ほどの問題の解決が出來ないのか。これは過大な富と平和の作つた吹出物だ。内部は腐爛しても、外面には人の知らぬ原因を示さないのだ。どうもありがたう。」

「御機嫌よろしう。」

隊長は兵士等を連れて立ち去つた。

ハムレットは一人になると考へた。すべての出來事は自分を面責し、自分の鈍つた復讐心を刺戟する。もし時を支配する一生の大事が、眠つて食ふだけに外ならなかつたら、それは單に獸物だ。われわれを造つて推理力を與へ、前を見、後ろを顧みさせた造物主は、この神にも似た理性を用ゐずに錆びさせよとて賜うたものではない。一體自分は獸物みたいに忘れ易いのか。それと

も事をあまり精密に考へ過ぎて狐疑逡巡するのか。實行するだけの理由も、體力も、方法もあるのに、自分は未だに（このことは爲すべきである）とのみ言ひ暮してゐる。この人數と軍資を備へた軍隊、これを引率する瀟洒な貴公子、その精神は神々しい功名心に滿ち、運命も、死も、危險も、敢てものともせず、名譽のかかはるところ、藁ほどのものにも爭ひ闘はなければならないのだ。それに自分の立場はどうだ。父は殺され、母は汚されて、わが理性と情熟を奮起せしめるに十分なのに、しかもそれを悉く眠らせてゐる。おお今日から以後、わが思ひよ殘忍なれ。さもなくば何の値打もないぞ。

柳の下

小唄の聲が聞える。

ぬしは伊達もの伊達すがた
一目にわかる枝わらじ
貝殼帽子をちよとあげて
御免くだされ　さままゐる……

細い、痩高い、若い女の聲である。それは悲しげにも聞えれば、楽しげにも聞える。メロディーは飽くまでも陽氣である。しかしその聲音には苦惱になやむ憂鬱がある。王妃ゲルトルードはふりかへつた。

「デンマークの美しいお妃様はどこ。」

聲の主はオフィリアであつた。

「おお、どうしました、オフィリア。」

王妃は驚きの目を見張つて、まじまじと見詰めた。

オフィリアはいつものやうに美しかつた。たとへば五月の花のやうに、生き生きした若い躍動する光輝が、あたりのものに照りはえてゐた。しかしその眼には以前の情熟と叡智を失つてゐた。かの女は今では落つきがなかつた。はにかみも、うぶらしさも、遠慮深さも、處女らしい愼みも見えなかつた。可哀さうに、かの女は氣が狂つたのだ。父の變死はかの女を心から悲しませた。しかも頼りにする兄はパリーに行つてゐて、側にはゐなかつた。愛するハムレットはかの女にほんたうの心をうち明けようとはしない。ハムレットにしてみれば、子供のやうに單純なかの女を愛すればこそ、この虚僞と罪惡と汚辱に滿ちたデンマークに置くことは不安であつた。世間とかけはなれた尼寺にその濁りに染まぬ身を托すことこそ、永遠にその純潔を保つことになるとしか思はれなかつた。しかしその深いハムレットの心持はかの女にはわからなかつた。のみならず、ハムレットは今では追放の身である。イギリス行の船は彼を乗り込ませて出帆した。かうして一時に降つて湧いた環境が、かの女の小さな腦髓を破産させた。

「ねえ、お聞きになつてくださいな。」

オフィリアはさう言つて、また一とくさりの小唄をうたつた。

「オフィリア、その小唄の意味は。」と王妃は訊いた。
「何ですつて。まあ、どうぞ。」
オフィリアはまた小唄をやめようとはしなかつた。
王がそこへはひつて來た。
「ああ、あれを御覽遊ばしませ。」と王妃は言つた。
王はやさしく聲をかけた。
「どうだな、オフィリア。」
「ありがたうございます。達者でございます。人の話では、兄はパン屋の娘だつたと申します。ほんたうに今のこの身はわかつてゐますけど、先々のことはどうなるものやらわかりません。あなた樣の食卓にも神樣の御惠がありますやうに。」
「そちの父のことを考へてゐるのだな。」
「もう何も申上げないことにいたしませう。でもこれはどういふことかと人が聞きましたら、かう仰やつてくださいまし。」
そしてまたオフィリアは小唄をうたつた。
「こんな風になつてから、どれほどになる。」と王はまた訊いた。
「どうか、何も彼もよいやうになりますやう。人は辛抱が大事でございます。けれども わたくし泣かずにはゐられません。みんなで冷めたい土の中に寢かせたのだと思ひます。兄がきつとそ

のわけを知つてゐるでございませう。ほんたうに御意見をありがたう存じます。さあわたくしの馬車を。皆さま、さやうなら。皆さま、さやうなら、さやうなら。」
オフィリアはさう言ひながら、何處ともなく馳け去つた。
戸外に騷音が聞える。群衆が今王城に殺到したのである。(レーアチーズを王にする)といふ叫び聲も聞える。武裝に身を固めたレーアチーズが昂奮に顏を輝かしながらはひつて來た。
「兇惡非道の王よ、父を返して貰ひませう。」
レーアチーズは王を見ると、いきなり叫び立てた。
「まあ落ちついて、レーアチーズ。」と王妃はなだめるやうに言つた。
「落ちつくやうな血の滴が、ただの一滴でもあるなら、それは自分を私生兒と宣告し、父に對して妻を盜まれた阿呆と叫び、純潔無垢な母の額に淫婦といふ烙印(らくいん)を捺すやうなものです。」
レーアチーズはまだ沸然として吐鳴り立てた。
王は落ちつき拂つて言つた。
「この巨人の暴れ廻るやうな騷ぎは、一體何が原因なのだ。」
「父はどこにゐます。」
「なくなつた。」と王は答へた。
「どうしてなくなりました。誤魔化さうたつて、誤魔化されませんぞ。忠義は地獄へ行け。君臣の誓約はまつ黑な惡魔にくれてやる。良心も、信心も、無間の奈落へ落ちつちまへ。地獄へ墮ち

ようとも自分はびくともせん。自分はただ思ふ存分父の讐を討つまでです。」

「誰がそちを留めるものか。」と王は意味ありげに言つた。

「自分の意志以外には、世界中何物の力も自分を留めることは出來ないのです。」

「レイアチーズよ、そちは愛する父の死因について正確なことを知りたがつてゐるが、いざ復讐となれば、無鐵砲な博奕うちが勝つても負けても盆を擲つてゆきたがるやうに、敵も味方も一雖にするつもりか。」

「いや、目ざすは敵だけです。」

「その敵を知りたくはないか。」

「味方に對してはこの兩腕を一文字にひろげ、生命も惜まぬペリカン鳥のやうに、わが血を以てもかれらを養うてやります。」

「それでこそ孝子でもあり、まことの紳士でもある。予がそちの父の死について罪はなく、むしろ痛切にそれを悲しむものであることは、光線がそちの眼に入るごとく、そちの判斷力を射抜いて。更に疑ひを留めぬだらう。」

奥から一としきり騒音が聞えて來た。その中に交つて（はひらせろ、はひらせろ）と叫ぶ聲がした。

「どうしたのでせう、あの物音は。」とレーアチーズは聲のする方をふりかへつた。

オフィリアが出て來た。頭や襟に草花を美々しく附けてゐた。レーアチーズの眼はオフィリア

にこびり附いた。彼は絶叫した。

「おお熟よ、この腦漿を乾からびさせろ。七倍鹽つ辛い涙よ、眼の感じも働きも燒き盡してしまへ。おお、五月の薔薇、いとしい少女、やさしい妹、美しいオフィリア。おお神よ、うら若い少女の理智が老人の命のやうに、かくも朽ち果つるといふことがあり得ることだらうか。性は愛によつて微妙になる。その微妙な魂が、愛するものの跡を追つて、歸らぬところへあばれ去つたのか。」

妹の聲が突然彼を沈默させた。

擔ぐ柩はむき出しで
へ、ノン、ノニ、ノニ、へ、ノニ
墓にや涙の雨がふる——

オフィリアは兄の前へ進み出た。

「さあ、これ迷迭香なのよ。かたみにとつて置いて頂戴。」

そして一輪の美しい花をレーアチーズの手に渡した。オフィリアはそれからまた言つた。

「あなた、覺えててね。さあ、三色菫よ、物思ひの花よ。」

「狂氣の中にも教へがある。物を思へ、紀念にせよとは。」

レーアチーズは半ば泣いてゐた。オフィリアは王に茴香と小田巻草を、王妃に芸香を與へて、また言つた。

「あなたは茴香、それから小田巻草。あなたには芸香。わたしにも少し取つて置きませう。これはね、安息日の祈草といふものよ。あら、あなた、その芸香を着けなくてはだめよ。それから雛菊もあるわ。菫もあげたいけど、父のなくなつた時にみんな凋んでしまひました。人の話では父はほんたうに立派な御最期でした……」

「悲しみ、憂ひ、惱み、地獄の呵責までも、妹の口にかかれば美しいものになる。」

レーアチーズははふり落ちる涙を拭はうともせずに呟いた。オフィリアはまた小唄を口吟みながら何處ともなく出て行つた。

「おゝ神樣、あなたはあれを御覽ですか。」

レーアチーズは男泣きに泣いてゐた。

「レーアチーズよ。」と王は呼びかけた。「予にそちの悲しみを分つてはくれまいか。そちが一番賢明だと信ずる友達を選んで、そちと予の間を審判させるがいい。萬が一にも、この罪に予の手を貸し與へた關係があると決定されるなら、この王國も、王冠も、生命も、またわれらのものと呼ぶ一切の財寶をも、潔くそちに取らせよう。もしまたさうでなかつたら、予の言ふことを心をしづめて聞いて貰ひたい。そこで予もそちと力を協せ、そちの滿足のゆくやうに取計らはう。」

王の言葉はレーアチーズの昂奮を鎭めた。王はポロニアスの殺害者がハムレットであり、またそのハムレットは王の命をも求めてゐることを喋べつた。レーアチーズは王の說明を疑はなかつた。しかし、王の生命に危害を加へようとするその重犯者を、なぜ今日まで打ち棄てて置いた

か、それが不思議に思はれた。

「それには二つの特殊な理由がある。」と王はレーアチーズの疑問に答へて、言葉を續けた。「恐らく御身から見れば、何でもない事のやうに思はれやうが、予にとつては力强い理由である。彼の母なる妃は、彼を見ることを樂しみに生きてゐると言つてもよい。そしてまた予には、褒むべきか、呪ふべきかは知らぬが、妃は予の生命であり、予の魂である。星はその環內をしか運行しない。予も妃の傍を離れては生きられないのだ。もし一つは、予がなぜ表向の沙汰にせぬかと言へば、庶民が彼に抱く大なる愛のためだ。かれらは罪も過もおのが偏愛の中に浸し、彼を拘禁すれば却つてこれを人氣に換へるばかりだ。そこで予の放たうとする矢は、民衆といふ大風には矢柄あまりに輕く、またもとの弓に戻つて來るまでも、目指すところへは屆かないのだ。」

ハムレットから王に宛てて手紙が屆いた。ハムレットはイギリスへ行く途中から引返へして來た。明日は龍顏を拜し奉らんと書いてあつた。

ハムレットが歸つて來たといふ知らせは、復讐に燃えるレーアチーズを心からよろこばせた。

「冷えた心臟も熟して來た。よし、王子の鼻の先で、（覺えがあらう）と言つてやらう。」とレーアチーズは言つた。

「ではレーアチーズ、そちは予の忠告に從つてくれるか。」

「從ひます、强いて平和にとの仰せでさへなければ。」

「ハムレットがもし航海半ばに歸國して重ねて行く意志がなかつたら、予は彼を巧みに說き伏せ

て、今この頭の中に成熟した一つの大仕事をさせよう。しかも彼の死については、風ほどの非難の噂も起らず、彼の母さへこのたくみに心づかず、却つてこれを不慮の變事と呼ぶであらう。」

「わが君、喜んでお指圖に從ひます。」

「二た月前ノルマンヂーから一人の騎士が來た。彼は御身の腕前を噂しをつた。劍道にかけては、わけても細身刀の術については、天晴れ師表に立つものだといつた。彼のこの噂はハムレットの羨望をいたく刺戟し、御身が歸國して一勝負する日を、切に乞ひ且つ願うてゐた。ところでハムレットが歸つて來たら、御身は父の子たることを示すため、言葉以上に實行すべきどんな言葉がある。」

「敎會堂の中だつて構ひません、王子の喉を引つ切つてくれます。」

「いかなる靈場でも、殺人の罪は免れられまい。復讐に障害があつてはならぬ」と王は言つた。

「しかし、レーアチーズよ、御身はしばらく御身の室に閉ぢこもつてゐなさい。ハムレットが歸つて來たら、御身の歸朝を告げ知らせ、それから二三の者をけしかけて御身の優秀さを賞めそやさせよう。そしてフランス人が御身に與へた名聲に二重の上塗をして結局兩人に試合をさせ、それぞれに賭をしよう。彼は不注意な、愚直な、何等わるだくみのない男だから、試合の劍を改めるやうなことはよもすまい。そこでやすやすと僅かの狡智を以て、御身は尖留のない劍を選び計略の一擊で父の仇を報いられるといふものだ。」

「是非さういたしませう。そしてその目的のため、自分の劍に毒を塗りませう。自分は嘗てある賣藥屋から油藥を買ひ取りましたが、それが頗る劇藥で、一度それに尖端を浸せば、月の下のあらゆる藥草を集めて精製した丸藥を以てしても助からなければ、引掻いただけの傷を受けた者でも到底、死を免れません。劍の尖端にこの毒を塗りませう。」

王は考へた。萬一この計畫が失敗した時、更に第二の方法で彼をやつつけなければならない。念には念を入れるために、王は今第二の方法を思ひついた。王はそこで言つた。

「兩人は突擊中熱して來て渴きを覺えるだらう……またさうなるやうに、御身の立ち廻りを一層激しくして貰ひたいが……その時彼は飲み物を求める。予はその場合のため、特に杯を準備して置かう。彼がそれを啜りさへすれば、偶々御身の毒ある刄を免かれたとしても、われわれの目的は達せられるのだ……しつ、あの物音は。」

王妃が急ぎ足に出て來た。

「何事か、ゲルトルード。」

王は言つた。

王妃はおろおろ聲で叫んだ。

「一つの悲しみが、ほかの悲しみの踵を踏んで、こんなにも早く追ひかけて來やうとは思ひませんでした。レーアチーズよ、そなたの妹御は溺死しました。」

「なに、溺死ですと。おお、どこで。」

レーアチーズはぎくりとして訊きかへした。

王妃は悲しげに答へた。

「一本の柳の木が小川に斜めに延び育つて、白い葉裏を鏡なす流れに寫してゐました。そこへそなたの妹御は、自分でつくつた花冠を持つて來ました。毛茛だの、にら草だの、雛菊だの、またはしたない羊かひは厭な名で呼びますが、無垢の處女だちは死人の指と呼んでゐるあの紫蘭などで出來てゐました。そしてこの野の花の冠を、垂れ下つた細枝に懸けようとして攀ぢ登りました。するとその横枝は裂けて、野の花の冠も、その身も、咽ぶ小河に落ちました。裳裾が擴がりました。妹御は人魚のやうに、しばらく身體を支へてゐました。その間古い小唄を口吟みながら、自分の不幸を感じないかのやうに、水に生れ、水に慣れた生き物そのままに、しかもそれも僅かの間でした。水に浸つて重くなつた衣裳は、あはれな者の唄をやめさせて、水の底へと引込んでゆきました。」

「おお、では妹は溺れ死にしたのですか。」とレーアチーズは絶望的な聲を振りしぼつて訊いた。

「さうです、さうなのです。」

王妃は兩手を眼に當てた。啜り泣きの聲が洩れて來た。

「可愛いオフィリア、そちは水には飽いたであらう。だからおれはもう涙は流さない。とはいへ、これがおれたちの癖だ。涙が出ずにはゐられない。この涙が乾いてしまへば、女々しい心は去つてしまふのだが。さらば、わが君、胸に火のやうに燃え立つやうな言葉はあつても、この涙

に消されるのだ。」

レーアチーズは悄然として立ち去つた。

墓掘り

墓場である。

墓掘りが死んだオフィリアの墓穴を掘りながら、陽氣に唄をうたつてゐる。ハムレットがホレーショを連れて通りかかつた。

「お前は一體どんな男のために穴を掘つてゐるのだ。」とハムレットは訊いた。

墓掘りは答へた。

「男のためぢやござんせん。」

「では、どんな女の。」

「女でもねえでがす。」

「その中に埋められるのは誰だね。」

「もと女の人だつたがね、可哀さうに、死んぢまひましたよ。」

ハムレットは苦笑した。

「此奴、何て小面倒なことを言ふんだらう。言葉の表でも擴げて置いて話をせんことには、紛らはしくてまゐつてしまふ。ホレーショ、わしは近頃注意してゐることだが、時勢が恐ろしく豬口

才になつて、百姓の爪先が廷臣の踵に届き、凍瘡を引つこする位になつたな。」

蕪掘りは髑髏を土の中から掘起した。

「それは誰のだ。」とハムレットは訊いた。

「氣狂野郎、病氣にでもかかりやがれ。」と墓掘りは忌々しさうに叫んだ。「此奴一度わたしの頭にライン酒をぶつかけやがつた。この髑髏がヨリックと言つて、あの王樣のおたいこもちでがしたよ。」

ハムレットはその髑髏を取り上げた。

「これがか。」

「さうでがす。」

「ああ、可哀さうなヨリック。ホレーショ、わしはこの男を知つてゐたよ。むだ口の多い、奇想群を抜く男だつた。わしを何百たび背負うてくれたらう。今それを考へるだけでも忌はしい。ここに唇が附いてゐた。わしは幾度ここに口づけをしたことか。どうだ、お前の嘲弄の言葉はどこにある。お前の道化踊は。歌は。いつも食卓をやんやと言はせたあの閃く輕口は。齒をむき出したその顏を嘲るものは、もう一人もゐないのか。うんともすんとも言はないのか。さあ、貴婦人方の部屋へ飛んで行つて、これ位の器量よしになるまでには、一インチ位の厚さに塗りたくらなきやなるまいと言つて、笑はせて來るがいい。ホレーショ、そちはどう思ふ。」

「何でございますか。」とホレーショは訊きかへした。

「アレクサンドルも土の中ではこんな姿だらうな。」

「さやうでございませう。」

「そしてこんな臭ひがするかな。ペッ。」

ハムレットは髑髏を下に置いた。

「さやうに存じます。」とホレーショは言つた。

「われわれは死後どんな卑しい用に使はれるかも知れんぞ、ホレーショ。氣高いアレクサンドルの遺骨にだつて、想像の跡をつけて行けば、遂には土になつて、酒樽の注ぎ口を支へでゐまいものでもないからな。」

「さうお考へになるのは、あまり好奇に過ぎてゐられるではないでせうか。」

「いや、決してさうではない。そこまで彼を追跡するのは、少しも誇張ではない。いいか。アレクサンドルが死んだ。葬られた。塵に歸した。塵は土だ。土だから粘土が出來る。ところで、彼の變形であるその粘土で、ビール樽の栓にしないと言ふことが果して言へるだらうか。堂々たるケーザルも、死しては一片の粘土と化し、穴を塞ぎて風を防ぐに足りぬべし。お！ 嘗ては全世界を震撼せしかの土よ、今は眞冬の烈風に破れたる壁を綴る。しつ、靜かに。あちらから王が來る。」

僧官、その他行列をつくつて、オフィリアの柩がやつて來た。レーアチーズ及び哀悼者がこれに續いた。王、王妃、その他の侍臣等も見えた。ハムレットは叫んだ。

「妃に廷臣だちだ。かれらが送つて來たのは何者だらう。しかもあんな片輪の儀式だ。察するところ、この死者は絶望の手を以て、われから生命を亡したにちがひない。可なり地位のある者であらう。しばらく隠れて見てゐよう。」

ハムレットはホレーショを連れて急いで退いた。

「ほかに儀式は。」とレーアチーズは焦々して叫んだ。

僧官の一人が答へた。

「この方の御葬儀は宗法の許すかぎり、十分鄭重に執り行ひました。實は御最期の樣子が疑はしかつたので、畏き勅諚がござりませんでしたら、法の定めを枉げることなく、聖式をも行はずに土中に葬りまして、最後の喇叭のひびくを待ち、祈禱の代りに瀬戸物の破片や、石や、瓦などを投げるところでした。しかるに處女にふさはしい花冠とか、かたの如き撒き花とか、また鐘などを鳴らしまして、安息の家へとお伴れ申したのは、これは特別のお取計ひでした。」

「すると、これ以上の式は出來ぬといふのか。」とレーアチーズは昂奮して吐鳴つた。

僧官は頑として主張した。

「出來ません。平和にこの世を去つた魂のやうに、(永久の憩ひ)やその他の安息の歌をうたふことは、葬儀の神聖を瀆すものです。」

レーアチーズは決心して叫んだ。

「妹を土の中に入れい。あの美しく一點の汚れのない肉體から、菫の花を咲き出させろ。情知らず の僧侶たちが、喚きながら經を讀んでゐる間に、妹は天の使になつてゐるにちがひないわ。」

ハムレットはホレーショを連れて出て來た。

「何、あの美しいオフィリアが。」とハムレットは思はず叫んだ。

王妃は花を撒きながら言つた。

「美しい人に美しい花、さらば。そなたがわたしのハムレットの妻となる日を望んでゐたのに。美しいをとめよ、そなたの花嫁の床を飾らうとした花を、今のこの墓に撒かうとは、どうして思ひかけませう。」

「おお、三言の悲しみよ。」とレーアチーズは涙聲でまた言つた。「三十倍になつてあの呪はれた頭の上に落ちかかれ。彼奴の殘忍な行ひのためにばかり、お前の正氣を奪はれてしまつたのだ。待て。土をかけるのはしばらく待て。もう一度この腕に妹を抱かなければならん。さあ、死者生者の區別なく土を盛れ。この平地から山が出來て、昔のピリオン山にも、青いオリンパス山の天にも屆く頂にも劣らぬほどにして見せろ。」

レーアチーズはその言葉の終るか終らない中に、墓穴の中に飛び込んだ。

ハムレットは後を追ふやうに飛び出した。彼は叫んだ。

「おお、何者なればかくもその哀愁を誇張するか。この哀悼の言葉を聞いてゐると、空をめぐる遊星もあつけに取られた聽き手のやうに、しばらくは足を停めるだらう。かくいふおれはデンマークの王嗣ハムレットだ。」

ハムレットはさう言ふより早く、續いて墓穴の中に飛び込んだ。

「おのれ、外道に魂を渡しをれ。」とレーアチーズは喚めいた。

墓穴の中では二人が揉み合つた。レーアチーズの手はハムレットの喉にかかつた。ハムレットはその手を押除けようとしてもがいた。ハムレットは叫んだ。

「これこの手を喉から放してくれ。おれは立腹しても焦立つてもゐない。しかもおれの中には危險なものがある。そちが賢明なら恐れてもよい筈だぞ。やい、この手を放さんか。」

「兩人を引き分けッ。」と王は絶叫した。

「ハムレット、ハムレット。」と王妃も叫び立てた。

侍臣たちが口々に叫んで兩人を引分けた。レーアチーズとハムレットは墓穴から再び出て來た。

ハムレットは言つた。

「なあに、おれの臉が動かなくなるまで戰つてもよかつたのだ。おれはオフィリアを愛してゐた。四千人の兄がその愛のすべての量を束にしても、おれの總額にはかなふまい。お前はオフィリアのために、何をしようといふのだ。」

「おお、これは氣が狂つてゐるのだ、レーアチーズ。」と王はレーアチーズをなだめるやうに言つた。

「後生だから我慢しておくれ。」と王妃はハムレットにやさしく聲をかけた。

ハムレットは尙ほレーアチーズを見据ゑながら吐鳴つた。

「さあ、何をしようといふのか言つて見ろ。泣くのか。爭ふのか。斷食するのか。自分を引き裂くのか。酢を呑み干すのか。鰐を食ふのか。おれだつてやるぞ。お前はべそをかきにここまでやつて來たのか。女の墓に飛び込んで、おれに恥をかかせようといふのか。生きながらあれと一緒に埋められようといふなら、おれも埋められよう。お前が山について廣言するなら、二人の頭の上に幾萬エーカーの土をかけさせ、その天邊を日輪の火に焦がさせて、オッサの高嶺も疣ほどに見せてくれる。なに、お前が大言壯語するなら、おれも劣らずわめき立てるぞ。」

「これはまつたくの狂氣です」と王妃はおろおろして言つた。しばらくかうして置いたら、やがて母鳩が黄金色の對の雛を孵した時のやうに、沈默が靜かにまた戻つて來るでせうから。」

ハムレットはまた吐鳴つた。

「これ、レーアチーズ、どんな理由でお前はおれをこんな風に扱ふのだ。おれはいつもお前を愛してゐた。しかしそんなことはどうでもよい。ヘルクレスがどんな努力をしたところで、猫は猫に喧き立てようし、犬は犬に變りはないぞ。」

ハムレットはそこで突然歸つて行つた。

「ホレーショ、あれについてゐてくれ。」と王は言つた。

ホレーショはハムレットの跡を追つて行つた。

王はレーアチーズに言つた。

「昨夜予が申した言葉を思ひ出して、今暫く忍耐してゐてくれ。あのことはすぐ斷行することにしよう。ゲルトルード、お前の子に氣をつけてゐてくれ。この墓には並ならぬ紀念碑をつくらせねばならない。やがて平和な時が見られよう。それまでは萬事に忍耐だぞ。」

して王はほくそ笑んだ。王の言葉には、ハムレットを犧牲にする意味が籠められてゐた。

試合

ハムレットは王城の中で、ホレーショに歸國の顚末を話してゐる。彼は船中で國書をひそかに見て、彼がイギリスに着くとすぐ殺される運命になつてゐることを知つた。驚いた彼はそれを改竄して、この國書を持參する二人を到着次第殺すやうにと書き、恰度彼が持つてゐた父王の印を押して、もとのところへ納めて置いた。次ぎの日海賊に襲はれて、不思議な緣で無事に歸國したのである。話中に廷臣オズリックがはひつて來た。

「若君の御歸朝を謹んでおよろこび申上げます。」とオズリックは言つた。

「大きに有難う。」とハムレットは言つた。「ホレーショ、そちはこの水すましを知つてゐるかな。」

「いえ、存じません。」とホレーショは答へた。

「すればそちは予よりは惠まれてゐるよ。あんな男を知つてゐるのは惡だからな。彼は地所持で、しかも豐沃なものを持つてゐる。獸になるなら、獸の王になれだ。すればその秣槽(かひばをけ)を王の

食卓と並べることが出來る。あいつはお饒舌烏だが、今も言つた通り、廣大な土地を持つてゐるのさ。」

「若君、御上からの御傳言を一言申上げたうございます。」とオズリックは言つた。

「よろしい。あらゆる勤勉な心を以て拜聽しよう。ところで、その帽子を眞當(まつたう)に用ゐらるべきところに用ゐたらどうかね。帽子は頭へ載せるものだからな。」

「厚くお禮を申し上げますが、きびしいお暑さでございますから。」

「いや、それはとんでもない、ひどく寒いよ。北風だよ。」

「いかにも隨分寒うございますな。」

「しかし、それにしても予のごとき體質の者には、ひどく蒸々して暑いね。」

「大きに左樣、大變蒸暑いことで。なぜだかは申せませんがな。いやなに若君、御上よりの御下命で、若君のために大層もない賭物(かけもの)を遊ばされたことを言上せよとのことでございます。えい、その要點は……」

「どうかまあ忘れないで貰ひたいね。」

ハムレットは彼に帽子をかぶれと手で差圖してから言つた。

「若君、この方が勝手でございまして。」とオズリックは答へた。「ところで、この度歸朝されましたレーアチーズどのは、虛僞りのないところ申分のない紳士でございます。つまりその、特色ある長所を備へて、社交ぶりもみやびやかであり、風采も至極立派でございます。理解ある論評

をいたしますれば、この人こそ紳士道の眞の典型、もしくは案内書とでも申しませうか。その故をなぜかと申しますと、いやしくも紳士たる者の備ふるかぎりの美德を悉く備へてゐられるからでございます。」

ハムレットは首肯いた。

「彼の面目はそちの述ぶるところによつて遺憾がない。ただ予を以て見れば、彼の長所を目錄式に分割することは、記憶の算數を幻惑し、しかも彼の早い船足を追ひかけきれぬことにならう。さりながら、予は彼が偉大な人物たることを信じてゐる。彼の天分は高くて貴い。彼をほんたうに述べるには、彼に似たものはただ彼の鏡であるといふほかはない。彼を摸倣する者は、ただその影を捕へるに過ぎぬのだ。」

「若君の仰せは、彼について斷じて誤りなきものでございます。」とオズリックは合槌を打つた。

「といふわけは。」

「私の申しまするは、彼が劍を握つた場合でございますが、世間の評判では、彼の力量はまことに比類なきものとのことでございます。」

「彼の選ぶ劍は何か。」

「細身刀と短劍でございます。」

「うむ。まさに彼の得意にちがひない。それで。」

「御上には彼にバーバリ馬六頭をお賭けになりました。これに對しまして彼は、フランス製の細身刀並びに短劍六口、これに革帶、劍吊り、その他の附屬品を賭けました。中でもその運搬用具中の三種は、技巧のまことに立派な、第一つかともしつくり合つた、最も精巧、優美を盡した細工にございます。」

「その運搬用具とは何をいふのか。」とハムレットは訊いた。

「これを御理解になるには、註釋書によるより外はありますまい。」とホレーショが側から口を入れた。

「はい、その運搬用具と申しますのは、つまり劍吊りでございます。」とオズリックが說明した。

ハムレットは笑つた。彼は言つた。

「驟に大砲でも吊り下げて歩くのなら、その用語も似合はうがね。それまでは劍吊りにして置いて貰はう。兎に角、バーバリ馬六頭、對六口のフランス劍、その附屬品、三種の凝つた劍吊りと、それではまるでデンマーク對フランスの賭だな。」

「御上には若君と彼との間の十二度の試合中、彼は三當り以上を勝てまいとあつて、卽ち九對十二の賭になされたのでございます。若君の御許しさへあらせられまするとすぐ樣試合といふことに相成るのでございます。」

「では、予はここの廣間をぶらぶらしてゐよう。御上の御意に叶ふならば、時刻は恰度予の運動時間だから、あの人も承知で、御上の御意が變らぬなら、試合刀を持つてまゐるがよい。出來れ

ば勝つてみせよう。出來ないにしても、何も損をするものはない。恥をかいて、二三度突かれるだけのことだ。」

「さやうに復命いたしてよろしうございませうか。」

「この要點をな。飾りはどんなにでもそつちの自由だ。」

「若君にわたくしの忠勤を推奬いたします。」

「ありがたう、ありがたう。」

オズリックがかへつて行つた。

「自分を推奬するとはよく考へたよ。誰も彼に代つて口を利いてくれる者はあるまいからな。」

とハムレットはオズリックを見送つて笑つた。

「あのなべげりは頭に殼をつけて飛んでゆきます。」とホレーショも苦笑した。

「お世辭を言つて置いて、お乳を吸ふつていふ奴さ。この末世にちやほやされる大勢の奴等は、時代の調子ばかりを呑込み、辭令の上つ面をのみ學んでゐる。あぶくのやうなものの集りだが、それでも賢愚さまざまの人の判斷を、どうにか凌いで通つてゆく。だが、一吹き試みに吹きつけられると、あぶくは忽ち消えてしまふよ。」

「しかし、この賭事にはお負けでございませう。」とホレーショは心配げに言つた。

ハムレットは冠りを振つた。

「いや、さうは思はない。彼がフランスに行つて以來、予も斷えず練習してゐた。あの數の違ひ

なら勝てる。しかし、御身には分るまいが、ここの、この胸のあたりが、何としても惱ましい。だが、何でもないことだ。」

「若君にはどうかなされましたか。」とホレーショは眉をひそめて訊いた。

「いや、愚にもつかぬことさ。一種の疑惑だよ。女子の心を騷がす類のものなのだ。」

「もしお心がお進みになりませんやうでしたら、おやめになつたらよろしいかと存じます。わたくしから御上のお成りをお止めして、若君の御不快の趣を申上げることにいたしませう。」

ハムレットは慌ててホレーショを引きとめた。

「決して、決して。われわれは前兆などを氣にかけはしない。一羽の雀の墜ちるにも、特別な天の攝理がある。今來れば後に來るはずはなく、後に來なければ今來よう。よしやまた今來ずとも、やがて來る時があるだらう。覺悟が第一だ。人は殘してゆく世に何の執着もなければ、時到つてこれを捨てるのに、何の悔があらうか。」

王や王妃や、レーアチーズや、貴族たちが、大勢そこへ出て來た。オズリックや試合刀を持つ從者等もその後から附いて出て來た。

「ここへ、ハムレット。ここへ。さあさ。この手を執つてくれ。」

王はレーアチーズとハムレットの手を互に握らせて言つた。

ハムレットはレーアチーズに會釋して言つた。

「予の罪を許してくれ。相濟まぬことをした。しかし紳士らしくそれを許してくれ。ここにゐ

られる方々も知つての通り、また御身も定めし聞かれたであらうが、予は烈しい精神錯亂で、身も心もいたく惱まされてゐる。予のなしたことは、御身の孝心、御身の名譽心、御身の不快を、刺戟したことであらうが、それはみんな狂氣のためであつた。レーアチーズに對して濟まぬことをしたのは、ハムレットであつたか。決してハムレットではない。もしハムレットが本心を奪ひ去られて、彼自らでない時に、レーアチーズに濟まぬことをしたとしたら、それはハムレットがしたのではない。ハムレットはそれを拒絶する。では一體誰がしたのか。彼の狂氣がしたのだ。もしもさうだとすれば、ハムレット自身も濟まぬことを仕向けられた仲間の一人だ。彼の狂氣は、哀れなハムレットの敵なのだ。この衆人稠座の中で、予が故意に惡事をしたのではないことを宣言することにより、御身の最も寛大な心に訴へて、屋根越しに矢を放つたことから計らずも自分の兄弟に傷を負はせたものと、から思つて許して貰ひたいのだ。」

ハムレットの言葉を聞くと、レーアチーズは顏の色を幾分柔らげた。彼は伏せてゐたその眼をあげてハムレットを見た。彼は蟠りのない聲で言つた。

「感情の上では解けました。この感情の動くところ、復讐へとわたくしを導くべきではありますが。しかしながら、面目の點では尙ほ親しみがたく、いかなる和解にも承諾いたしますまい。しかるべき長者の和解により、名譽を傷つけずに平和を結ぶことの出來るやうな先例を聞きますまでは。それまではあなたの友愛のお言葉を、お言葉の儘に受けて置き、不當の疑念をさしはさむことはいたしますまい。」

「予はそれを信ずる。」とハムレットは言つた。「そして兄弟のこころを以て、いさぎよくこの試合をやらう。試合刀をこれへ。さあ、來た。」

「さあ、ここへも一つ。」とレーアチーズも叫んだ。

「予は御身の引立役だらう、レーアチーズ。予といふ闇雲の中で、御身の技倆は暗夜の星のやうに、一層輝かしく光を放つことであらう。」

「御冗談を。」

「いや、この手にかけて、決して。」

その時王は言つた。

「オズリック、兩人に劍を與へよ。みうちのハムレット、そちは賭を知つてゐるかな。」

「存じてをります。御上は弱い方へ重い賭をなさいました。」とハムレットは言つた。

「さうは思はない。」と王は答へた。「兩人の腕は見てゐる。しかし、レーアチーズは 聊か 上達してゐる。だから數遣ひにはして置いた。」

「これは重過ぎる。」とレーアチーズは劍を振りながら言つた。「もう一つ見せてくれ。」

レーアチーズは尖留のしてゐない試合刀を受取つた。

「これが丁度手頃だ。この劍はみな同じ長さであらうな。」とハムレットは言つた。

「左樣でございます。」とオズリックが答へた。

ハムレットとレーアチーズは試合の準備にかかつた。

王は言つた。

「酒の大杯をその卓上に置け。もしハムレットが第一、もしくは第二の當りをとるか、それとも三度目の手合せに彼に仕かへしをしたら、砲壘から大砲を打鳴らせ。王はハムレットの未來を祝して杯を擧げよう。そしてその杯の中に大眞珠を投げ入れよう。四代のデンマーク王が次ぎ次ぎにその王冠をつけたものより、更に立派なものをな。その杯をこれへ。そして銅太鼓は喇叭に合圖し、喇叭は外なる砲手に、大砲は天に、天は地に、(今王はハムレットのために杯をあげる)と傳へさせい。では初めい。審判官たちはよく眼を見張るのだ。」

「さあ、來い。」とハムレットは言つた。

「さあ。」とレーアチーズも續いた。

二人は試合を初めた。

「一つ」とハムレットは叫んだ。

「いや。」とレーアチーズも叫んだ。

「審判。」とハムレットは呼びかけた。

「當り。」とオズリックが叫んだ。「立派な當り。」

「よし、もう一度」とレーアチーズは吐鳴つた。

「待て、酒を注げ」と王は言つた。「ハムレット、この眞珠はそちのものだぞ。」

王は杯に眞珠を入ると同時に、毒をも投げ入れた。喇叭が鳴り響いた。奥から大砲の音が聞え

て來た。

「ハムレット、そちの健康を。」と王は言つた。「彼に杯を與へよ。」

「まづこの一と勝負を果しませう。」とハムレットは言つた。「杯はしばらくそこへ。」

二人はまた烈しい試合にかかつた。

「も一つ當り、どうだ。」とハムレットは吐鳴つた。

「かすりだ、かすりだ、たしかに。」とレーアチーズが喚いた。

「王子が勝ちさうだ。」と王が言つた。

「太つてゐるから呼吸が切れよう。」と王妃が言つた。「これ、ハムレット、このハンカチで額を拭くがいい。妃(きさき)はそなたの幸運を祈つて、祝の杯を乾しますぞ。」

「どうぞ。」とハムレットは言つた。

「ゲルトルード、それを飲んでは。」と王はけたたましく叫んだ。

「飲ませて戴きます。」王妃の凛とした聲が聞えた。「御免くださいませ。」

「毒の杯ぢや。ああ、もう遲い。」王は苦惱に充ちた聲を響かせた。

「わたくしはまだ飲めません、母上。やがて。」とハムレットが叫んだ。

「ここへ。」と王妃は慈悲を籠めた聲で叫んだ。「わたしにその顏を拭かせておくれ。」

「御上、今度こそ當てて御覽に入れますぞ。」とレーアチーズは喚いた。

「むづかしいものだ。」と王は信用しないやうな聲で言つた。

レーアチーズは低聲で自分に言つた。

「だが、何となく良心に咎められる……」

「さあ、三度目だ。」とハムレットは高聲に叫んだ。「レーアチーズ、御身は本氣になつてゐないな。いや、うんとしつかり突込んで貰はう。御身は予をなぶつてゐるのではないか。」

「さう仰やいますか。さあ、來い。」とレーアチーズは別な聲で言つた。

二人はまた烈しく闘つた。

「いや、まだまだどちらも。」とオズリックは聲をかけた。

「さあ、當り。どうだ。」とレーアチーズが叫んだ。

レーアチーズは今ハムレットを突いた。しかしハムレットは怯まなかつた。彼は忽然としてレーアチーズに應戰した。試合は亂闘となつた。ハムレットはレーアチーズの劍を奪ひ取つた。レーアチーズは投げられたハムレットの劍をとつた。ハムレットは狂つたやうにレーアチーズを突いた。

「分けい。」と王は喚いた。「兩人は逆上いたした。」

「なあに、さあ來い、もう一度。」とハムレットは吐鳴り立てた。

王妃が倒れた。

「おお、お妃さまには、おお。」とオズリックは奇聲を上げた。

「雙方とも怪我してゐる。」とホレーショは叫んだ。「若君、いかがなされました。」

「どうしました、レーアチーズどの。」とオズリックも吐鳴つた。

「なにさ、オズリック。」とレーアチーズは言つた。「わが罠にかかつた山鷸同樣、自分の惡事の報いで殺されるのは、正當な天罰だ。」

「妃には何となされました。」とハムレットは氣遣はしげに聲をかけた。

一兩人の出血を見て、氣を失つたのだ。」と王は言つた。

「いえ、いえ、あの酒、あの酒。」と王妃は苦しげな聲を絞つた。「おお、ハムレット、あの酒、あの酒、わたしは毒害されました……」

王妃の聲はそこで斷えた。王妃はそして死んだ。

「おお、大罪。こら、戸口を堅めい。叛逆者だ。早く探し出せ。」

ハムレットはぎくりとして吐鳴り立てた。レーアチーズの聲が、その叫びに答へた。

「叛逆者はここにゐる。ハムレットさま。あなたの命もない。世界中のどんな靈藥もその用をなしません。もう半時のお壽命もありません。あなたのお手にあるものが、不義背信の道具です。尖留がありません。その上毒が塗られてゐます。この奸計は己れに還つて來ました。わたしもここに倒れて、二度と起つことは出來ません。お母上は毒殺されました。もう力及びません。王こそ……王こそはその罪人です。」

ハムレットは忽然として手の劍を見た。

「この尖端。」とハムレットは叫んだ。「それに毒まで。では毒よ、汝の仕事を果せい。」

ハムレットはいきなりその劍で王を突き刺した。

「大逆……大逆……」と一同は口々に叫び立てた。

「おゝ方々、護つてくれい。ほんの手傷を負うただけだ。」

王は一同をなだめるやうに言つた。

ハムレットは猛り立つて王に呪詛の聲を浴びせた。

「おのれ、邪婬、非道、殘虐のかぎりを盡して、地獄の呪ひを受けたデンマーク王、この一杯を飲み干せ。汝の大眞珠はここにあるのか。母上の跡を追つてゆけ。」

王の答はなかつた。彼は返辭を與へる前に死んでゐた。

レーアチーズは言つた。

「彼には正當の報復です。その毒こそ彼自身の盛つたものですから。ハムレットさま、どうぞ心からの許しをわたくしと取り交してください。わたくしの死も、父の死も、その咎があなたに墜ちることなく、またあなたの死もわたくしの責めとなりませぬやうに……」

その聲はもう聞えなくなつた。レーアチーズはあへなく死んで行つた。

ハムレットは愁然として言つた。

「願はくば天もその罪を許したまへ。予はやがて後を追ふぞ。ホレーショ、もう予の命はない。いたはしい母上、おさらば。皆の者、この不時の災厄に顏青ざめ、慄ひ戰のいて、この慘劇の無言役か聽衆となつてゐるに過ぎないが、もし予に時さへあらば、死といふ苛酷な警吏が捕縛を少

しく猶豫してくれるなら、おお、語るべきことは山ほどある。しかし、どうでもよい。ホレーショ、今はもうこれまでだ。御身は後まで生きながらへて、予と予の志のあるところを、知らぬ人々に正しく傳へてくれ。」

「思ひもよりません。わたくしはデンマーク人たるよりも、むしろ古へのローマ人になります。ここにはまだ毒液が殘つてゐる。」

ホレーショはその杯を取片けようとした。するとハムレットは逸早くその手にしがみついた。

「いや、その杯をこつちへ寄こせ。離せ。いや、予が飲む。おお、ホレーショ、かうしてことのわけがわからないでゐると、どういふ汚名が予の死後に殘らうも知れん。もし予を思ふ御身の心に變りなくば、しばらく天に往く幸ひをさし控へ、この世に惱ましい呼吸をつづけて、予のために事の仔細を語つてくれ。」

遠く進軍喇叭が聞える。近くに大砲の音がする。

オズリックが言つた。

「フォーチンブラスがポーランドからの凱旋でございます。またイギリスの使臣が來着いたしたため、この禮砲を放ちました。」

「おお、最後は來た、ホレーショ。」とハムレットは言つた。「あの激しい毒藥は、予の元氣をことごとく斃倒してしまつた。もう生きてイギリスの知らせを聞くことは出來ない。予は豫め遺言する。わが國の王嗣をフォーチンブラスに定めよう。予は斷末魔の一票を彼に投ずる。」

ハムレットの聲はそこで途絶えて、彼は絶息した。

「けだかき御心も今は碎けた。」とホレーショは溜息を吐いて言つた。「おさらばでございます、美しい若君、天使の群が來て、永遠の安息所へとお伴れ申すでありませう。」

進軍の音樂がだんだん近く聞えて來た。

ロメオとジュリエット

舞踏會

音樂がやんだ。今まで踊つてゐた人々は崩れ出して、一時に話聲や笑ひの聲が起つた。大廣間には燈火が煌々と點いて、それが女たちの衣裳や寶石に搖いでゐる。花の匂ひや化粧品の匂ひが、蒸暑い室の中の空氣に溶け合つて流れてゐる。

キャピュレット家の春の假面舞踏會といへば、ヴェロナの町に知られた年中行事の一つであつた。町の有力家や社交界の人々は早くから着飾つてやつて來た。舞踏が次ぎ次ぎに行はれた。夜ほ次第に更けはじめたが、人々はまだ歸らうとはしなかつた。

主人のキャピュレットは男や女たちの間を縫ひながらにこやかに會釋した。

「ようこそ、方々。足指に肉刺の出來てゐない御婦人たちが、舞踏のお相手をなさいませう。おや、これは御婦人方、どなたです。踊るのは嫌だと仰やるのは。尻ごみなさる方はきつと肉刺が出來てゐるのでせう。どうです、當つたでせうが……」

そしてキャピュレットは陽氣な笑聲を響かせた。廣間を一と廻りしながら、方々に挨拶を交はす彼の聲は、尙ほ續いた。

「ようこそ、皆さん。わたしどもも昔は假面を附けて、美しい御婦人の耳許に、お氣に召しさうな內緒話をしたものだが、もう過ぎた、過ぎた、過ぎましたよ。ようこそお出でなされた、皆さん。さあ、樂手ども、はじめなさい。場をあけて、場をあけて。ずつと廣くした。お嬢さん方、

さあ踊つた、踊つた。」

音樂が再び起つた。舞踏がまたはじまつた。キャピュレットがまた吐鳴つてゐる。

「もつと燈火だ、おい給仕ども。それからテーブルを疊みなさい。爐の火を消せ。室が熟くなり過ぎるぢやないか。まあ、お坐りください、お坐りください。お互ひに踊の日は過ぎた。一緒に最後に假面を着けてから何年になるかね。」

一隅では傍の給仕人を呼びとめた若者が、低聲に訊いた。

「君、君。あの、向うの騎士の手を握つてゐるのは、どちらのお孃さんかね。」

「存じませんな。」

給仕人は行つてしまつた。

物足りなげに給仕人を見送つた若者は、まだ彼方の騎士と話してゐる娘を見やつてゐた。若者は獨り言した。

「ああ、あの美しさは炬火にもつと輝けと激へてゐるやうだ。夜の頰にくつきりと浮んでゐるあの風情は、エチオピアの黑人の耳にかけた貴い寶玉そつくりだ。用ゐるにはあまりに艶麗で、地上にはもつたいたさ過ぎる美しさだ。あの娘がほかの女たちの中にまじつてゐる樣子は、雪を欺く鳩が烏の群に降りたのとまるで同じだ。この踊が濟んだら、あの娘の手に觸れて、この賤しい手を祝福しよう。おれの心は今まで戀をしてゐたのか。眼よ、それは嘘だと言へ。今夜までほんたうの美人を見たことはまだなかつた……」

タイバルトはその聲を聞きつけると、ぷんぷん怒りながら人混みの中から出て來た。

「あの聲はモンタギュー家の者に相違ない。おい、おれの細身刀を持つて來い。」

タイバルトは從僕に言ひつけた。

「不埒千萬な。奴隷め、道化の假面に隱れてやつて來て、われわれの宴會を愚弄するつもりか。よし、わが一族の名譽にかけても、あいつを叩き殺してくれるぞ。」

「これ、どうしたのだ、甥よ。なぜそんなに猛つてゐる。」

キャピュレットはこの妻の若い甥に聲をかけた。

「叔父上、あいつはモンタギュー家の者ですよ。惡黨め、今夜のわれわれの宴會を愚弄しようといふんです。」とタイバルトは昂奮して言つた。

「ああ、ロメオのことか。」

キャピュレットはタイバルトの指さす方を顧ると言つた。

「さうです。惡黨のロメオです。」

「甥よ、靜かにしな。ほつとくのだ。ロメオは品位ある紳士らしく振舞つてゐるぢやないか。實際の話がヴェロナの町も彼を誇とし、有德な、品行のいい青年だとしてゐる。この町中の富に代へても、わしの家で彼に危害を加へるやうなことをしたくない。だから我慢して、そんなしかめ面はよしてくれ。今夜のやうな宴席には不似合だ。」

「いや、似合ひます。」とタイバルトは言ひ張つた。「あんな惡黨がお客なら、わたしは勘辨出

來ません。」

キャピュレットはたうとう憤り出した。

「これ、いかんと言ふに、馬鹿な。ここの主人はわしか、それともお前か。お前はわしの客人の間に騒動を起すのか。お前は平地に波瀾を起す張本人だぞ。」

「でも叔父上、恥辱です。」

「馬鹿な。わからない奴だ。そんなことをしちや身のためにならんぞ。さあ、靜かにしないか……」

そして給仕人に呼びかけながら、人々の中にはひつて行つた。

「おい、もつと燈火を、燈火を……」

ロメオは事實この舞踏會に出席の出來る身分ではなかつた。彼はこのヴェロナの町にキャピュレット家の敵手として知られたモンタギュー家の獨り息子である。ロメオはキャピュレットの一族のロザリンを戀したが、ロザリンが更にとり合はないので、ロメオはすつかり氣を腐らせてゐた。それを見た從兄のベンヴォリオは、ロメオをキャピュレット家の舞踏會に引張り出した。ロメオはキャピュレット家の一人娘のジュリエットを一目見るより、その胸は怪しく掻き亂された。ジュリエットはこの八月の初穗祭が來れば、十四歳になる娘であつた。ロメオは嘗てこれほど美しい女を見たことはなかつた。かの女に比べれば、ロザリンは白鳥を裝ふ鴉に過ぎなかつた。

ロメオはジュリエットに近寄つて、言つた。

「もしわたしのこの賤しい手で、この尊い御堂を瀆したのが罪でしたら、唇といふ二人の顏を赤らめた巡禮がやさしい接吻で、はしたない手の觸つた痕を淨めようとして待つてゐます。」

ジュリエットは冠りを振つた。

「いいえ、巡禮さん。それは禮儀の厚い信仰の心を示すものです。さう仰やるのは、御手をあまり輕しめるものですわ。巡禮は聖者の手へさへ觸ります。掌と掌は棕櫚の印の巡禮僧の接吻とか申します。」

「聖者にも唇はあります。聖なる巡禮僧もまたこれを持つてゐます。」

「さうですの。でもその唇は祈りに用ゐる習ひです。」とジュリエットは言つた。

「では、わが聖者よ、手のすることを唇にもさせたまへ。唇がかう祈ります。お聽き入れください。さもないと、信仰が變つて絶望となるでせう。」

「聖者の心は動きません、祈りの心は酌むにしても。」

「では動かないでいらつしやい、その祈りの效驗を受けるまでは。かうしてわたしの罪は、あなたの唇の功德で浄められます。」

ロメオはジュリエットに接吻を與へた。

「そんならその罪がわたしの唇に移つたのですか。」とジュリエットは訊いた。

「罪が移つたかと、おお、何といふやさしいお咎めでせう。その罪をかへしてください。」

「何彼と言ひこしらへては、接吻なさるのね。」とジュリエットは笑つた。
「もし、お母様がお呼びでいらつしやいます。」と乳母がそこへ出て來て言つた。
ジュリエットはすぐに馳け出して行つた。
「あの方のお母様とはどなたです。」とロメオは訊いた。
「あれ、奥にいらつしやるお若い方。」と乳母は指さして答へた。「この家の奥様です。わたしはその方のお嬢様にお乳をあげました。今あなたとお話していらしつた方がその方です。ようございますか。あの方を手に入れる方には、どつさりお金がはひりますよ。」
乳母は言ひ捨てて出て行つた。

果樹園

闇にまぎれてキャピュレット家の果樹園にまぎれ込んだロメオは、燈火の射してゐる二階の窓にジュリエットの姿を見附けると、胸を躍らしながら忍び寄つて、灯の明るいその窓を見あげた。ジュリエットは戸外を向いて窓に立つた儘、物思ひに打ち沈んでゐる樣子である。爽やかな夜風が何かの花の香を送つて來る。明けやすい夏の夜は、夜明けまでにまだ間があるらしい。
あの窓から射す光は何だらうとロメオは思つた。あれは東、そしてジュリエットは太陽だ。お、日を開く。しかし何も言はない。それよりもあの目が物を言つてゐる。答をしようか。しかしそれは向う見ずだ。天上の美しい二つの星が何か用があつたので、歸つて來るまで代りに光つ

てゐるやうに、あの人の目に頬んで行つたのだらう。あの目は暗闇を貫いて、あかあかと光を曳いてゐる。小鳥に翼だと思つて、唄をうたふだらう……ジュリエットの手に頬を支へた。ああ、わたしがあの手袋だつたら、そしてあの頬に觸ることが出來たなら……
二階の窓からジュリエットの溜息が聞えて來た。何か言つてゐるな。どうぞもう一度、あなたがわたしの頭上にあつて、この夜に榮える有樣は、大空の眞只中を馳けてゆく翼ある天の御使そのの儀だ……
ジュリエットの獨り言する聲が聞えて來た。
「おお、ロメオ。お父様を棄て、家の名を棄てて來てください。そしたらわたしもキャピュレットではなくなります。薔薇が何かほかの名に變つたところで、いい匂ひに變りはありません。だからあなたがロメオでなくなつても、あなたの持つてゐる懷しさは殘ります。ロメオ、どうかあなたのお名を脱ぎ棄てて、その代りにわたしといふものを取つて、わたしの身も心もあなたのものにしてください。」
ロメオは階下から言つた。
「お言葉通りにあなたを戴きませう。わたしを一言戀人と呼んでください。わたしは新たに洗禮を受けて、今からロメオではなくなります。」
二階の窓のジュリエットはびつくりして外の暗の中に聲の主を目で探した。
「一體あなたはどなた。夜の帳にかくれて、わたしの秘密を聞いた方は。」

「わたしはあなたの敵だから、わたしの名はわたし自身にも厭はしいのです。」

「おお、わたしの耳はその聲でわかります。あなたはロメオです。モンタギュー家の方です。」

その時月が登つた。庭の中の木々に銀色に輝き出した。

「もしあなたが嫌ひだと仰やるなら、わたしはロメオでも、モンタギューでもありません。」

ロメオはまだ蔭さしてゐる暗闇の中から月の光が明るく射してゐる中に出ると言つた。

ジュリエットは驚きの聲をあげた。

「まあどうしてあなたはここへいらつしたの。もしや家の者に見附かりでもしたら、あなたの命はありませんよ。」

「いいえ、戀するほどの者は何なりとやつてのけます。お家の方だとて、わたしをどうすることが出來るものですか。それとも、もしあなたがわたしを愛してくださらないなら、いつそ見つかつて憎しみを受けて、この命を終りたいのです。その方が愛されずに死を伸ばされるより、どんなにましだか知れません。」

「でも、あなたは誰に教はつて、ここがわかりました。」

「戀に教はつて。戀はわたしに智慧を貸し、わたしは戀に眼を貸しました。わたしは水先案内ではありません。だが、あなたが遠い遠い荒磯の濱邊にいらつしたとしても、かういふ戀のためなら、冒險を惜しみますまい。」

「御覽の通り、わたしの顔は夜といふ假面を着けてゐます。でなければ、をとめ心の恥かしさで、わたしの頰は赤くなつたでせう。でも今夜わたしが喋べつてゐるのをお聞きになつた通りですもの。あなたはわたしを愛してくださいますか。（さうだ）と仰やるのを知つてゐます。そしてそのお言葉を信じます。」

「姫よ、あの惠まれた月を證人として、あの果樹の梢を銀色に染めなす月にかけて、わたしは誓ひます……」

「いいえ、あの變り易い月にかけて誓ふのはやめてください。月は夜毎に廻る圈を變へます。あなたの戀も同じやうに變るならばともかくもですが。」

「もしもわたしの魂の切なる戀が……」

「もう誓ふのはやめてください。わたしはあなたのお言葉を聞いてゐるのはうれしうございますが、今夜のこの約束は少しもうれしいとは思ひません。あまり慌しく、あまり無分別で、あまり突然ですもの。光つたと思ふ間に消える稲妻に似てゐます。ではお休みなさいまし。この戀の蕾は夏のそよ風に育まれて、また逢ふ日には美しい花とも咲くでせう。さやうならお休み遊ばせ。樂しい憩ひと平和が、この胸の中にあるやうに、あなたのお心にも訪れますやうに。」

「おお、あなたはこんな不滿足な氣持の儘で、わたしを殘して行くのですか。」

「今夜どんな滿足を得ようと仰やるの。」

「わたしのと引換へに、あなたの戀の眞實の誓ひをぜひしてください。」

「欲しいと仰らないうちにさし上げてしまひました。もう一度さし上げることが出來ればよう

ございますのに。」

「では引込めたと仰やるんですか。何のために。」

「惜しみなく、重ねてお上げするために。でもわたしはあなたにも、わたしと同じやうに限りないものを持つていただきたいと思ひまして。わたしの情けは海のやうに果しなく、わたしの愛はあなたにさし上げればさし上げるほど深くなりますから。ロメオ、あなたのお心持が浮いた戯でなく、まこと結婚をなさらうといふなら、明日使を出しますから、何時何處で式をあげるかをお知らせくださいまし。すればわたしのすべての運命をあなたの足元に投げ出して、世界のどんな果てまでも、良人のあなたについてまゐります。」

「では九時に。」

「きつと使をさし上げます。」

待つ宵

ロメオは托鉢僧ローレンス上人の庵室を訪づれて、ジュリエットのために上人の助力を懇ひたいと申出た。上人はロメオがロザリンを戀してゐたことを知つてゐた。移り氣な若者の戯に呆れて、ロメオに意見した。しかしロメオは飽くまでも熱心であつた。彼は上人に二人の合體の式を司つて貰ひたかつた。もしこの二人の秘密の結婚によつて、多年結んで解けなかつた兩家の舊怨を解くことが出來るならばといふ考から、上人は遂にその日の午後、二人の結婚を司會した。

結婚式を果してのかへり、ロメオは街の中でキャピュレット夫人の甥タイバルトに逢つた。假面舞踏會の晩にロメオが假裝して忍び込んだのを知つて、その場に斬殺さうといきまきながら、叔父のキャピュレットのために制せられて、その意を果たさなかつた彼は、今ロメオに向つて讒謗を極めた。ロメオはジュリエットの親類に當るこのタイバルトと決鬪しようなどといふ氣はなかつた。しかしロメオの友のマキューシオは心から怒つて、ロメオの代りに鬪ひを挑んだ。驚いたロメオは二人の仲にはひつて、それを留めようとした。その刹那タイバルトは仲裁者の蔭からマキューシオを突刺した。ロメオはもうタイバルトを許すことが出來なかつた。タイバルトはロメオのために討たれて一命を失つた。マキューシオはヴェロナ領主ススカラスの一族であつた。この街頭の騒動はすぐに領主の耳にはひつた。ロメオは追放に處せられて、即時ヴェロナを立退かなければならぬ身となつた。

キャピュレット家の一室では、秘密の結婚を濟ませて歸宅したジュリエットが、その夜新婚の歡樂を盡すために忍び來るロメオを、今や遅しと待ち受けてゐた。

「日輪の御殿に急ぐ淺瞞の駿馬よ、フェートンの鞭がお前を西に追つたら、曇つた夜をすぐに連れて來ておくれ。戯の實行者の夜よ、お前の黑い帳をひろげて、どうか人目を避けておくれ。ロメオはあだ名も立てられずに、この腕の中に飛び込むにちがひない。戯する者は自分の美しさで戯の儀式を取り濟ますのだ。それとも戯が盲目なら、夜こそ何よりもふさはしい。嚴めしい夜よ、黑裝束の地味な衣裳を着た主婦よ、穢れのない操を賭けたこの賭け事に、どうしたら負ける

かを敎へておくれ。わたしの頰に酉さすこの血潮を、お前の黑い帳でかくしておくれ。物おぢする戀も大膽になつて、眞の戀路を遂げるのは操に叶つたことと思ふやうにならう。夜よ、ロメオよ、來ておくれ。夜の闇に蹉とも見える御身が夜の闇に乘つたら、烏の背に降る雪よりも白く見えるにちがひない。やさしい夜よ、愛らしい黑い眉の夜よ、わたしのロメオを渡しておくれ。ロメオがもし亡くなつたら、連れて行つて小さな星に刻んでおくれ。そしたら天の顏は光り輝き、世界中が夜を戀して、けばけばしい太陽などを誰も禮拜しはすまい。おお、わたしは戀の家を買つたけれど、まだそこには住まないし、わたしの買ひ手はあつたが、まだ享樂されてゐない。今日の日の長いこと、まるで新らしい着物は出來ても、着る許しがないので、明日のお祭を待ちかねてゐる子供のやうだ。」

乳母が戸外から歸つて來た。從兄のタイバルトがロメオに殺されたことや、ロメオが追放の刑に處せられたことを、乳母の話で知つたジュリエットは、氣も狂ふばかりに驚いた。

「おお神よ、ロメオの手がタイバルトの血を流したのか。」

「さうです、さうです、あゝ悲しい。さうでございます。」と乳母は泣きながら答へた。

「おお、花の顏で隱した毒蛇の心。あんな美しい洞穴に、惡龍の住んでゐたためしが昔からあつたらうか。美しい暴君。天使のやうな惡魔。鳩の羽した烏。狼にも似た貪慾な小羊。見かけは神々しいが、中味は卑しい。見かけとは打つて變つた地獄の聖者、名譽の惡黨。おお、自然よ。お前は地獄で何をする。あんな美しい肉體を持つた極樂の人間に、惡魔の魂を宿らせて。あんな美

しい裝釘の書物の中に、これほど卑しい內容が盛られるのだらうか。おお、あんな僞りが、あんな華やかな御殿に住まつてゐるのだらうか。」

「男には信用も、誠實も、正直もありません。」と乳母はまた泣きながら言つた。「みんな嘘つきです。誓言破りです、碌でなしです。ロメオの奴め、恥を搔くがいい。」

ジュリエットは乳母の言葉を聞き咎めて、嚴しく言つた。

「まあ、そんなことを。お前の舌は火ぶくれになるがいい。あの方は恥を搔きに生れになつたのではない。あの方の額には、恥の方で恥かしがつて坐らない。でもあの額は、名譽が世界で唯一人の王となつて坐る玉座なのだ。おお、あの方を惡くいふことは、わたしは何といふけだものだらう。」

「では、あなたはお從兄を殺した人をお褒めになるのですか。」と乳母は訊いた。

「わたしの良人を惡く言へと言ふのかい。ああ、お可哀さうに、どんな舌があなたのお名を元通りにいたしませう。一時でも連れ添ふたあなたの妻が、滅茶滅茶に切りさいなんだあなたのお名を。でも、何だつてわたしの從兄を殺したのでせう。さうしなければあの從兄があたしの良人の生命を取つたかも知れなかつたから。愚かな涙よ、お前の生れたもとの泉へ歸つておくれ。タイバルトに殺されたかも知れなかつたわたしの良人は生きてゐる。そしてわたしの良人を殺したかも知れなかつたタイバルトは死んでゐる。少しも厭なことはない。そんならどうしてわたしは泣くのだらう。タイバルトが死んだといふことより、もつと惡い言葉を、わたしは先きに聞いた。

それがわたしに死ぬ思ひをさせたのだ。わたしはそれを忘れてしまひたい。だがわたしの記憶にこびりつく呪はれた悪行が、罪人の心を離れぬやうに、タイバルトの死と、ロメオの追放であつた。そのたつた一言の追放が、一萬人のタイバルトが殺されたのと同じだつた。タイバルトの死はそれだけで終つたにしても、悲しみは十分だ。それとも苦い悲しみは連れが好きで、ほかの悲しみもつれだつて來たいなら、乳母がタイバルトが亡くなつたと言つた時、なぜお父様なりお母様なりが、それともそのお二人が同時に亡くなつたと續けなかつたらう。さうしたら、一通りの哀しみに心を傷めただけであつたらうに。しかしタイバルトの死の後に、ロメオが追放といふからには、父も、母も、タイバルトも、ロメオも、ジユリエットも、みんな殺されて、みんな死んだも同じことだ。ロメオが追放といふ言葉に含まれた人を殺す力には、終りもなく、限りもなく、境もなく、どんな言葉を用ゐても、この悲しみを言ひ盡されない。乳母や、お父様とお母様はどこにいらつしやるの。」

「タイバルトさまの死骸に縋つて、泣き悲しんでいらつしやいます。」

「お二人はあの人の傷を涙で洗つていらつしやる。わたしの涙はお二人のが乾いた時、ロメオの追放のために盡きてしまはう。その綱を拾つておくれ。可哀さうな綱よ、あてがはづれたのよ、お前にしても、わたしにしても。ロメオは追放されたんだもの。あの方はお前をわたしの寢床への通ひ路になるためにお造りなされたのに。もかし處女のわたしは、男知らずの寡婦で死んでしまひませう。乳母や、わたしは婚禮の床へ行かう。ロメオでない死の神が、女のわたしをどうと

もするがよい。」

「早くお部屋へいらつしやいまし。ロメオさまをお探しして來て、あたた様を喜ばせてあげませう。ロメオさまは今夜ここへお越しになりますよ。今ローレンス上人様の庵室に隱れてお出でですから。」

「おお、早く探して來ておくれ。この指環をわたしのほんたうの騎士にさし上げておくれ。」

追放

ローレンス上人の庵室にかくれて、領主の判決を待つてゐたロメオは、追放になつたことを知つた時、死ぬ以上の深い悲しみを味はつた。

ローレンス上人は言つた。

「おお、恐ろしい大罪。言語同斷な忘恩。お前の犯した罪は、ここの法律ではまさに死罪だ。それを寛大な領主様がお前の肩を持たれ、法律は措いて死刑といふ不吉な言葉を追放に變へられたのだ。有難いお情けだ。それがお前にはわからないのか。」

ロメオは冠りを振つた。

「苛責です。お情けではありません。天國は此處に、ジユリエットのゐるところにあります。猫でも、犬でも、小ぼけな二十日鼠でも、この天國に住んで、あの人を見ることが出來ます。それにロメオにはそれが許されない。このロメオより蠅の方が、もつと値打があり、もつとみやびた

生活が出來ます。それらはいとしいジュリエットの白い手に掴まつたり、あの唇から不滅の祝福を盜み取ることも出來ます。その唇は純潔な處女の愼ましやかさに上と下とが縺れあつて、罪を犯すとでも思ふのか、いつも眞赤になつてゐます。でもロメオにはそれが許されません。ロメオは追放の身です。蠅は自由、わたしは追放、それでもあなたは追放は死でないと仰やるのですか。わたしを殺すのに追放といふ言葉以外に、毒藥か、研ぎすましたナイフかで、すぐに始末をつける手段はなかつたのですか。追放。それは呪はれた者が地獄で使ふ言葉です。お上人樣、あなたは敎への人です、懺悔の司、罪を許す人、そしてわたしには人も知る親しい友です。それにあなたは追放などといふ言葉で、このわたしを切りさいなまうとするのです。」

「これは愚かな。狂氣せられたか。まあ、わしのいふことをお聞き。」

ローレンス上人は手を振つて言つた。

「ああ、あなたはまた追放を言つてらつしやる。」とロメオは怒つて叫んだ。

ローレンスは靜かに言つた。

「ではその言葉を避ける鎧を上げよう。不幸の時の甘い乳、すなはち哲學だ。お前の氣が晴れるやうにな。」

「いいえ、哲學なんて聞きたくはありません。哲學でジュリエットが出來、市が移され、領主の判決がひつくりかへれば別ですが、さもないかぎり、哲學なんて爲にもならなければ、役にも立ちませんよ。」

「さてさて、この狂人どのには耳がない。」と言つて上人は笑つた。

「賢い人には目がありません。」とロメオは噛み出すやうに吐鳴つた。

「まあ、まあ、とにかく、お前の身の振り方について話し合はう。」

「いいえ、あなたには出來ません。あなたには身に感じのないことですから。あなたがわたしほどに年が若く、ジュリエットといふ戀人があつて、結婚してからたつた一時の間にタイバルトが殺され、わたしのやうに愛に溺れて、わたしのやうに追放の身だつたとしたら、その時こそお話も出來、このやうに愛をむしり地べたに倒れて、まだ掘られない墓穴の寸法を取つてもゐられませう……」

その時誰か戸を叩いた。

「起きなさい、誰か戸を叩いてゐる。ロメオ、隱れなさい。」と上人は言つた。

「いいえ、隱れません。胸も張り裂ける溜息の霧がわたしを包んで、搜索の眼をくらませれば別ですが、さもなければ隱れません。」

「そら、起きた、起きた。早く書齋へ。ほんたうに何といふ愚かしいことだ。」

上人はロメオを無理に書齋に押しやつて、戸口をあけた。はひつて來たのはジュリエットの乳母である。

「わたくしジュリエットさまのところからまゐりました。」と乳母が言つた。

「おお、よく來られた。」

「お上人樣、お嬢樣の旦那樣は何處にいらつしやいますか。」

「そこの地べたに、自分の淚に醉つてな。」

「おお、お嬢樣もその通りです。」

「乳母や。」と呼びかけてロメオが出て來た。

「ああ、あなた。死んでしまへば何も彼もおしまひですよ。」と乳母は言つた。

「ジュリエットは何處にゐる。何をしてゐる。」と忙しく訊いた。

「おお、お嬢樣は、あなた、何も仰やらずに、ただ泣いて……」と乳母は泣きながら言つた。

「そして床の上にうつ伏しになるかと思ふと、また跳び起きて、タイバルトと呼んだり、ロメオさまと呼んだりして……」

「大方鐵砲の恐ろしい狙ひから發射したやうに、その名がジュリエットを殺してしまつたのだ。その呪はれた名のロメオの手が、かの女の親類を殺したのだから。上人樣、聞かせてください。この肉體のどの卑しい部分に、わたしの名が巢を喰つてゐるのです。聞かせてください。その憎らしいところを引き裂いてしまひます。」

ロメオは突然劍を拔いた。ローレンスはすぐに取りついて、その劍を取りかへした。

「これ、その自暴自棄の手を放せ。それでも男か。姿を見れば男に相違ないが、その淚は女々しいぞ。まつたくお前には驚いた。お前はもつと鍛えられてゐると思うてゐた。それにタイバルトを殺したばかりか、自分まで殺さうといふのか。のみならず、呪はしい憎しみの所行をわが身に

加へて、お前の命の中に生きてゐるジュリエットをも殺さうといふのか。何でお前は生を呪ひ、天を呪ふのか。生と天と地と、この三つのものはお前の中に集まつて一體となつてゐるが、お前はそれを一時に失はうと望んでゐる。お前は自分の姿や愛や智慧を辱しめるのだ。男の勇氣を棄てるなら、お前の氣高い姿は蠟細工にしか過ぎない。いたはらうと誓つた戀人を殺すなら、お前の大切な愛の誓ひも空誓文となる。お前の智慧、これは姿や愛の飾りだが、これが兩者を指導する道をあやまると、不慣れな兵士の彈藥箱にある火藥のやうに、自分の無知から發火してわが身を粉碎するのだ。元氣を出せ。お前のジュリエットは生きてゐる。お前はほんの今し方まで、その人のために死んだやうになつてゐたではないか。その點でお前は仕合せだ。タイバルトはお前を殺さうとしたが、お前がそのタイバルトを殺してしまつた。その點でも仕合だ。死罪は所詮免れまいと思つてゐた法律もお前の味方となつて、追放と變つた。これもお前の仕合だ。仕合の一包が、お前の肩に降つて來たのだ。仕合が晴れ着を着て、お前に愛嬌を振りまいてゐる。それに行儀の惡い、ふくれ面のはしためのやうに、お前は仕合に向ひ、愛人に向つて、口を尖らしてゐるのか。氣を附けなさい。そして氣を取直しなさい。さあ、豫定通りお前の愛人のところへ行つて慰めてやりなさい。だが夜警の廻つて來る頃までゐてはならんぞ。マンチュアへ行けなくなつてはならん。あの町で暮してゐれば、そのうち時を見てお前の結婚を披露して、兩家を和睦させ、領主のお許しを受けてお前を呼び戻さう。お前は今の嘆きに何萬倍する喜びを得るだらう。乳母やさん、さあ、一足先へ。」

「では……これはね、お嬢様からあなた様にと仰やつた指環でございます。」
乳母は指環をロメオに手渡した。そして上人に暇乞ひをした。

朝の獵歌

ジュリエットは跡らうとするロメオを引きとめた。
「まだ夜明けには間があります。あなたのおどおどした耳に聞えたのは夜啼鶯です。雲雀ではありません。夜な夜な向うの柘榴の木の上で啼く夜啼鶯です。」
ロメオはそれを信じなかつた。
「いや、あれは朝の先觸れの雲雀です。夜啼鶯ではありません。光の條が東の雲に笹縁をつけてゐます。夜の燭火は燃え盡しました。氣輕な朝が霧の深い山の頂からやつて來ます。わたしは生きてここを去るか、死んでここに留まるよりほかはありません。」
「いいえ、あの光は朝の光ではありません。わたしは知つてゐます。あれは太陽が發散する何かの流星で、今夜炬火持となつて、マンチュアへの道案内をするのです。だからもつとここにゐてください。いらつしてはいけません。」
「捕へられようと、死罪にならうと、あなたの望みならば、わたしは滿足です。では、あの空白みは朝の瞳ではなく、月の額の青白い反射だと申しませう。また歌聲が青空高く響き渡りはするが、あれは雲雀ではありません。わたしは立ち去るよりは、ここに留まりたいのが精一杯です。來れ、死よ、歡迎する。ジュリエットがそれを望んでゐる。どうじました。お話しませう。まだ夜は明けません。」
ジュリエットは耳を澄まして、戸外の小鳥の聲に耳を傾けた。突然かの女はロメオを突き退けて叫んだ。
「明けました、明けました。さあ、早く行つてください、早く。あれは雲雀です。調子はづれに唄つて、耳障りな、不愉快な甲高い聲を絞つてゐます。人は雲雀の聲はやさしいと申しますが、この雲雀はやさしくはありません。わたしたちを別れ別れにしますもの。また人は雲雀とひきがへるは目を取り換へたと申しますが、どうして聲まで取り換へなかつたのでせう。あの聲はわたしたちを驚かし、抱き合つた腕と腕を離れさせて、朝の獵歌であなたを狩り立てます。さあ、行つてください。だんだん明るくなつて來ます。」
「さうです、日はだんだん明るくなり、わたしたちの悲しみはだんだん暗くなります。」
そこへ乳母がはひつて來た。
「お嬢様。」
「乳母やなの。」
「お母様があなたのお部屋へお越しでいらつしやいます。もう夜が明けました。お氣をつけ遊ばせ。」
乳母は立ち去つた。

「では、窓よ、光を入れて生命を送り出しておくれ。」とジュリエットは言つた。
「さやうなら、さやうなら。」とロメオは言つた。「もう一度接吻を。そしたら降りて行きませう。」
二人は熱い接吻を取り交はした。ロメオは降りはじめた。
「戀よ、わが貴人よ。一時ごとに、毎日是非お便りを聞かせて。一分の間にも、幾日といふ思ひがします。でもそのやうに數へて行つたら、今度お逢ひする時、わたしは隨分年をとつてゐるでせう。」
ジュリエットの聲がロメオを追ひかけた。ロメオは振りかへつた。
「さやうなら。機會を逃さず、わたしの挨拶をなつかしいあなたに送ります。」
「わたしたちはまた逢ふことが出來るとお思ひになつて。」
「必ず。今日の悲しみは、やがて來る日の樂しい話の種です。」
「おお神樣。何だか縁起でもないことが考へられる。降りて下に立つてお出でのところを見ると、死んで墓穴の底にゐる人を見るやうな氣がする。わたしの目がかすんでゐるのでせうか。それともあなたのお顔が青白いのでせうか。」
「わたしの目にもあなたがさう見えますよ。悲しみの溜息が、わたしたちの血を吸つたのでせう。さやうなら、さやうなら。」
そしてロメオの姿は見えなくなつた。

「運命よ。」とジュリエットは言つた。「人はお前を移り氣と言ひます。もしも移り氣なら、誠實で知られたあの人に何の用があるの。運命よ、移り氣でおいで。そしたら、あの人を長く引き留めないで、かへしておくれだらう。」
母がはひつて來た。母は娘の泣き顔を見ると、タイバルトの死を悲しむ涙だと思つて言つた。
「お前は明後日ヴェロナ公の一族、パリス伯と結婚するのだ。お父樣はもう伯爵に獨斷で承諾したが、お前には何の不足もあるまい。母のこの話は、ジュリエットを驚かした。パリス伯がどんな男であらうと、今更二重結婚をしようとは思はなかつた。そこへ父がはひつて來て、娘が不承知と知ると心から怒つた。もはや子とは思はぬ、父とも思ふな、すぐにもこの家を出て行け、餓死ようと死なうと知るものではない。父はさういふと、席を蹴立てて母とともに出て行つた。
ジュリエットは身の不幸をローレンス上人に訴へるよりほかはなかつた。庵室を訪づれると、パリス伯がすでに婚約のことを話して、上人を當惑させたところであつた。パリス伯は間もなく立ち去つた。
「その戸を閉めて、そして閉めたらここへ來て、一緒に泣いてください。もう望みは絶えました。手だても絶えました。救ひの道も絶えてしまひました。」
ジュリエットはさめざめと泣いて言つた。上人はそれに答へた。
「おお、ジュリエット、聞かずともそなたの悲しみはわかつてゐる。わしもどうしてよいかわからない。そなたはいやでも應でも、今度の木曜には伯爵と婚禮をしなければならぬといふので

はないか。」

「上人様、どうしたらそれをせずに濟むかを敎へていただけない位なら、そんな話を聞いたなどと仰やらないでください。もしまたあなたの智慧で、何とか助かる手だてが考へつかぬものなら、わたしの決心を上分別だと仰やつてください。さうすれば、わたしはこの短劍でこの絲組を破ります。神樣がわたしとロメオの心を結びつけ、あなたが二人の手を結んでくださいました。あなたがロメオに結びつけてくだすつたこの手が、ほかの證書の封印を捺したり、眞實なわたしの胸が二ごころを抱いて、あだし男に騙く位なら、この短劍で胸も手も切つてしまひます。どうぞあなたの長い間の經驗から、さし當つての智慧をお貸しください。もしそれも出來ないとしたら、この苦難とわたしの間にこの短劍が裁き手となり、あなたのお年齡と智慧の力が、わたしの面目を立ててくださらなかつたものを裁いてくれるでせう。さあ早く仰やつて。あなたによい思案がありませんでしたら、わたしは死んでしまひたい。」

「まあ、お待ち。希望のやうなものが見えて來た。」と上人は言つた。「尤もわたしたちが避けようとしてゐることが並々ならぬものだけに、それを果たすには死物狂ひの決心が要る。パリス伯と一緒になる位なら、一層死なうといふ意志の力がそなたにあるなら、この辱しめを免れるためには、死ぬと同樣のことも、そなたにやつてやれないことはないやうだ。死に神とも組み打ちして、この辱しめを遁れようといふのだから。斷行する決心なら、その手だては敎へてあげよう。」

「おお、パリスさまと結婚する位なら、向うのあの塔の上から跳べと言つてください。追剝の出る道を歩け、蛇のゐる洞に潜めと言つてください。吠え狂ふ熊と一緒に繋いでください。からからと鳴る死人の骨や、臭い脚や、黄色い顎なしの頭蓋骨が、あたり一杯散らかつてゐる墓場へ、夜々わたしを閉め込んでください。それとも新佛の墓にはひつて、死人と一緒に經衣で姿を隱せと仰やつてください。聞いたばかりで身の毛のよだつことでさへ、愛する人の妻として生きてるためなら、わたしは怖いとも心配とも思はずに見事にやつてのけませう。」

「ではまあ靜かにお聞き。家へ歸つて、愉快さうな顏をして、パリスと結婚することを承知なさい。明日は水曜日。明日の晩は一人で寢る工夫をして、部屋に乳母も寢かさぬがよい。この硝子罎を持つて行つて、寢床にはひつたら、この藥を飲んでしまひなさい。すると忽ちそなたの血管に、冷たい、眠いやうな氣が傳はつて來る。いつもの脈は搏たなくなつて、止んでしまふ。身體は冷え、呼吸は止まり、どうしても生きてゐるしるしがなくなる。唇や頰の薔薇色も褪せ、青白い灰と變り、眼の窓は下りて、死に神が生命の日ざしを鎖した時のやうに、身體のどの部分もしなやかさを失つて、硬くこはばり、冷たくなつて、一見死人その儘となる。かうした死の假りの姿は四十二時間たつと、氣持のいい眠りから覺めるやうに目が覺める。そこで朝になつて花婿が來、そなたを床から起こさうとすると、そなたは死んでゐる。わが國のならはしによつて、棺臺の上に晴着を着て、掛物もかけず、キャピュレット家の一族が臥てゐる昔ながらの墓穴に連れて行かれる。そのうちにそなたが目を覺ます頃までには、わしが手紙でロメオにこのもくろみを知

らせて、ここへ來させる。そしてわしと二人で、そなたが目を覺ますのを待つてゐて、その晩すぐロメオがそなたをマンチュアへ連れてゆく。かうすれば、目前の恥辱を免れることが出來よう。氣が變るか、女々しい恐怖のために、實行の勇氣が挫ければ兎も角としてだ。」

「そのお藥をわたしに戴かしてください。わたしは怖がりはいたしません。」

上人は硝子罎の藥をジュリエットに與へた。そして言つた。

「歸つたら十分覺悟してかかるのだ。わしはすぐに使をマンチュアへ出して、そなたの良人に書面を贈ることにしよう。」

ジュリエットは喜ばしげに叫んだ。

「戀よ、わたしに力を與へておくれ。力がわたしを救つてくれるでせう。」

ジュリエットはローレンス上人の許から歸宅すると、兩親に向ひ、先きに父母の命に背いた不孝を詫びて、パリス伯との結婚を承諾した旨を述べた。父の悅びは一方ではない。初め木曜日と定めてあつた結婚の日を、明日の水曜に繰上げるとて立ち騷いだ。

ジュリエットは寢室に退くと、常には傍に寢させてゐた乳母を、母の許へ出してやつて、ローレンス上人から貰つて來た罎を取り出した。

「幽かな、冷めたい恐れが、この血管の中にぞくぞくして、生命の熱を凍らせてしまひさうだ。もう一度お母様と乳母やを呼び戻して、慰めて貰はうか。いいえ、ここへ來て貰つたところで仕方がない。わたしの陰鬱なこの一と場は、わたし一人で演らなければならない。さあ、罎よ。この藥が何の効能もなかつたとしたらどうだらう。そしたらわたしは明日の朝結婚することになるのだらうか。いいえ、これが止め役になるのだ。お前はそこに轉がつておいで。」

ジュリエットは罎を短劍の下に置いた。

「もしもこれが毒藥だとしたら」とジュリエットはまた言葉を繼いだ。「上人様がわたしを殺さうとして、巧みに慥らへた毒藥だとしたら。先きにロメオと結婚させたわたしを、今また結婚させては、自分の顏に關はるとでも思つてゐるのではなからうか。いや、いや、そんなことがあるものか。今日が日まで、あの方はあらたかな方で通つて來た人だもの。もしまた墓の中に置かれた後で、ロメオが助けに來てくれない先きに、ふと目を覺ましたらどうしよう。ほんたうにそれこそ恐ろしい。墓穴の中で、この息が詰りはしないか知ら。あの汚れた口へは淨い空氣がはひらないのだもの。そしてあそこで、ロメオの來ないうちに、窒息して死んだとしたら。よしんば死なないまでも、これはありさうなことだ。死と夜の身の毛のよだつやうな想像が、そこの恐ろしさと一緒になつて。あの墓穴は昔からの納骨所だ。幾百年もの間、死んだ御先祖様の骨が詰つてゐるし、血まみれのタイバルトが土に歸つてまだ間もない。それが墓衣を着けて腐りかかつてゐるのだ。人の話に聞くと、夜は精靈があすこに出入りするといふ。もしかすると、その忌はしい臭ひと、それを聞いた人間は狂亂するといふ土の中の叫び聲で、わたしの目を覺ますのが早過ぎたとしたら。目は覺ましても、かういふ忌はしい恐怖に圍まれて、氣が顚倒するやうなことはないか知ら。心が狂つて、御先祖様の手足に戲れでもしたら。切りさいなまれたタイバルトの墓衣

を引き脱がしでもしたら。猛り狂つて、遠い昔の御先祖様たちの骨を、棍棒のやうに振りまはして、絶望のこの腦味噌を叩き出しでもしたら。おお、ロメオ、ロメオ、わたしは、あなたのためにこれを飲みますよ。」

ジュリエットは藥を飲み干すと、その儘寢床にうち倒れた。

次ぎの朝、乳母がジュリエットの部屋にはひつて來た時まで、一家の人々は何も知らなかつた。

迷　迭　香

「お嬢様、お嬢様。ジュリエット様。まあよくお休みになつて。」乳母はジュリエットの部屋にはひりながら呼びかけた。「もしもし、お嬢様。おや、うんともすんとも仰やらないで。何てまああなたは、よくお休みになつていらつしやるんです。でも、どうしてもお起こしなくちや。お嬢様、お嬢様、お嬢様。では伯爵様に寢ていらつしやるところをお見せするがいい。さうしたらびつくりして、飛び起きるでせう。」

乳母はカーテンを引きあげた。

「おや、着物を着たままで。衣裳を着けて、また横におなりなさいましたの。お嬢様、お嬢様。」

乳母はびつくりして飛び退いた。かの女の眼はそこに死んで横はつてゐるジュリエットを、今

始めて見たのである。

「ああ、誰か、誰か。お嬢様がお亡くなりでございまう。これ、氣付け藥。おお、旦那様、奥様。」

乳母は狂心したやうに叫び立てた。

キャピュレット夫人がはひつて來た。

「どうしたの、この騷ぎは。」

「まあ、何といふ悲しい日でございませう。」

「一體何事なの。」

「御覽ください、御覽ください。お悲しい。」

キャピュレット夫人はがつくりしてジュリエットに縋りついた。ジュリエットの眼は再び開かなかつた。

「おお、おお、娘。」と夫人はジュリエットを搖りながら、聲を喘ませて言つた。「わたしのたつた一つの生命。生き返つておくれ。目をお開け。でなきや、わたしもお前と一緒に死んでしまひます。誰か來て。誰かお呼び。」

キャピュレットがはひつて來た。

「何といふことだ。ジュリエットを出さないか。婿殿がお見えだ。」

「亡くなられました。」と乳母はおろおろ聲で言つた。「おかくれになりました。お亡くなりに

なりました。ああ悲しい。」

「あなた、あの子は死にました。死んでしまひました。」と夫人も言つた。

キャピュレットは乳母を突き退けて進み出た。

「これ、わしにお見せ。おお、冷めたくなつてゐる。もう血は動かない。手足もこはばつてゐる。生命とこの屍は、疾うの昔別れ別れになつてゐる。時ならぬ霜が野邊のしをらしい花に降りかかつたやうに、死神が娘の上に降りてゐる。」

「何といふ悲しい日でせう。」と乳母は言つた。

「何といふ悲しい時でせう。」と夫人も言つた。

「死神めはここから娘をひつさらつて、おれを嘆かせたが、この舌まで縛つて、物も言はせない。」

キャピュレットは途方に暮れて叫んだ。

ローレンス上人とパリス伯が連れ立つてはひつて來た。

「花嫁には教會へ行く支度が出來ましたかな。」と上人は言つた。

キャピュレットは答へた。

「支度は出來ました。しかし二度と歸つてはまゐりません。婿殿、あなたの婚禮の前夜、死神があなたの妻と添寢をしましたよ。見てください。あすこに寢てゐます。花のやうだつたわしの娘も、死神のために色が褪せました。今ぢや死神がわしの養子です、わしの後嗣です。わしも死

んで、何も彼も死神にくれてやります。生命も、身代も、みんな死神のものです。」

パリス伯はジュリエットの側に寄つて、悲しげに呟いた。

「長い間、今朝のそなたの顏を見たいと願つてゐた。それにこんな姿を見せてくれるのか。」

キャピュレット夫人はまだジュリエットに縋りついた儘で、涙ながらに言つた。

「呪はしい、不仕合せな、情ない、厭らしい今日といふ日。長い苦しい巡禮の中でも、これまでになかつたほどの悲しい今といふ今。たつた一人の可愛い兒を、樂しみと慰めの一粒種を、酷たらしい死神が目に見えないところへ攫つて行つてしまひました。」

「おお、悲しい。こんな悲しい日に、こんなつらい日に、わたしは一度も逢つたことはございません。こんな不吉な日を、わたしは一度も見たことはございません。」と乳母が側から言つた。

パリス伯は立上つた。彼は失望して吐鳴つた。

「騙された。仲を裂かれた。誣ひられた。憎まれた。そして殺されたのだ。あの憎い死神めに。殘酷なお前はおれに背負投げを喰はせたのだ。戀人よ。生命よ。いや、生命ではない、死んでしまつた戀人よ。」

キャピュレットは縋いて叫んだ。

「見下げられ、苦しめられたのだ。憎まれ、迫害され、殺されたのだ。慰めがたい時よ。何だつてお前は今時分やつて來て、わしたちの祝ひを殺すのか。おお、娘よ。わしの魂。もう今ではわしの娘ではない。お前は死んだのだ。そして娘と一緒に、わしの喜びはすつかり埋められてしま

つた。」

ローレンス上人は靜かにその唇を開いた。

「これ、これ、恥かしいことでごわすぞ。」と上人はキャピュレットの肩に手をかけて言つた。「騷ぎを愼めるものは、かうした騷ぎの中にはないのぢや。この美しい娘御は、天とあなたの兩方のものだつた。ところが今ではすつかり天のものとなつた。その方が娘御にはよかつたのだ。娘御の中のあなたの持分。それをあなたは死から守ることは出來ん。しかし、天は永遠の生命の中に、その持分を保留なされる。あなたの第一の望みは、娘御の出世だつた。いい身分になられれば、それがあなたの天國だつた。それにあなたは今、娘御が雲の上までも、天そのものほどにも高く登つて、出世されたのを見て、お泣きになるのか。さういふ愛し方では、不祥の愛といふものぢや。娘御が安らかにゐられるのを見て、却つて氣を狂はしたといふものぢや。結婚してから長命するのが良緣だとは申されん。むしろ結婚して早く死ぬのが良緣といふものだ。涙を拭いて、この美しい死骸の上に迷迭香を挿し、ならはしに從つて晴着を着せて教會へお運びなさい。人情の愚かさは人をして嘆かせるが、その人情の涙こそ理智の物笑ひとなる。」

「祝ひにと命じて置いた一切を、もとの役目を止めて、不吉な式に變へるがよい。」とキャピュレットは言つた。「祝ひの樂は憂鬱な鐘の音に、婚儀の祝杯は悲しい埋葬の馳走に、嚴かな讃美歌は陰氣な挽歌に變へてしまへ。婚姻の花は葬られる死骸に役立たう。何も彼も反對だ。」

「さあ皆さん、この美しい死骸を、墓所まで送つてゆく用意をしてください。神樣はあなた方に

何か惡いことがあつたので、不機嫌な顏を向けてゐられる。その高い御心に逆らつて、これ以上お怒らせ申しては相成らん。」

ローレンス上人は嚴めしげな聲を放つて言つた。

和解

マンチュアに追放生活を送つてゐるロメオは、家僕のバルサザーが齎した悲報を受取つた。ジユリエットは頓死して、すでに埋葬されたといふのである。ロメオははじめ、これを信ずることが出來なかつた。それに上人からは書面も便りもない。しかし、愛妻の死に疑ひのないことを知ると、彼はすぐに死を決心した。彼はいつか街の中で、貧しい藥劑師の店を見た時、國法で販賣を嚴禁されてゐる毒藥の必要があつたら、いくらかの金を攝ませて、その毒藥を手に入れようと考へたことを思ひ出した。彼はすぐ街の中の藥劑師の店にやつて行つた。恰度休み日なので、店は締つてゐた。

「おおい、藥屋。」

ロメオは店先で吐鳴つた。

戸があいて、藥劑師が顏を出した。

「誰だね、そんな大きな聲をして。」

「君の貧乏はわかつてゐる。」とロメオは言つた。「さあ、ここに四十ダカットある。これを取

つて、毒を一匁ほどわたしに賣つてくれ。血管中を悉く行き渡るしろもので、世に飽き果てた飲み手をすぐに死なしてしまふやうな奴をな。それとも五體から呼吸を追ひ出す早さは、烈しい火藥が火を受けて、恐ろしい大砲の筒から飛び出すほどのものが欲しいのだ。」

藥劑師は答へた。

「さういふ生命取りの藥を、手前持つには持つてゐますがな。でもマンチュアの法律では、それを賣つたものは、すぐに誰でも死罪になりますよ。」

ロメオは笑つた。

「丸裸で貧乏しきつてゐても、それでも死ぬのは怖いと見えるな。飢は頰に、窮迫は眼に、そして貧困は背にぶら下つてゐる。この世の中も、この世の中の掟も、君の味方ぢやない。この世の中が君を金持にするやうな掟を出さない以上、いつそそんな掟を破つて、貧乏を止めたらどうだな。」

ロメオは手の金を藥劑師に見せびらかした。藥劑師はその金を、調べるやうに目で追ひながら、につこりしてうなづいた。

「よろしい。本心ではないが、貧乏が御言葉に從はせます。」

「これはその本心に拂ふのぢやないよ。貧乏に拂つてあげるのだ。」

藥劑師は毒藥を取出して、ロメオの手に渡した。そして言つた。

「ではこれをお前さんの好きな飲み物の中へ入れて飲んでください。たとへお前さんに二十人

力があつても、忽ち苦もなく片づけてしまひますよ。」

ロメオは金をそこへ置いた。

「さあ、これが金だ。人間の魂にはこの方が尙ほ一層惡い毒だ。この厭な世の中で、淺ましい人殺しをやるのは、多くはこれがもとで、君が賣つてやらないこのけち臭いまぜものぢやない。毒を賣るのはこのわたしさ。君の賣るものは何でもない。でほさやうなら。食べものでも買つて太りな。毒ではない昂奮劑よ。さあ一緒にジュリエットの墓まで出掛けようか。そこでお前にぜひ頼みたい用があるからな。」

ロメオが家僕のバルサザーを連れ、馬を走らせてヴェロナの町に忍び込んだ時は、もう夜が更けてゐた。

その夜パリス伯は小姓を連れ、花束と炬火を携へて、キャピュレット家の墓地にやつて行つた。

パリスは人に見られたくはなかつた。炬火の火を消して、水松の木の下に、小姓を見張りに殘した。そして人が來たら、合圖に口笛を吹くやうに命じた。

パリスはジュリエットの墓の前に近づくと花束を捧げ、あたりに水を撒いて祈つた。

「美しい花の御身、御身の新床に花を撒き散らさう。おお、可哀さうに、御身の天蓋は土塊と石だ。わたしは夜ごとにここへやつて來て、匂ひの高い水で濕ほさう。もしそれでも足らなければ、わたしの嘆きの涙を添へることにしよう。御身に捧げる手向は、御身の墓に花を撒き散らし

て泣くことなのだ……」

パリスは暫ぐ泣いてゐた。

小姓の口笛が聞えた。

パリスは人が來たことを知つた。彼は急いで物蔭に身をかくした。

ロメオとバルサザーがそこへやつて來た。バルサザーは炬火と鶴嘴を持つてゐた。

「おい、その鶴嘴と螺旋廻しをこつちへくれ。」

ロメオは手紙をバルサザーに渡した。

「それからこの手紙をそちに渡して置くぞ。明日の朝早く間違ひなくこれを父上にお屆けしてくれ。燈火をよこせ。そちの命にかけてしかと言つて置くが、そちは何を見ようと聞かうと、遠く離れてゐて、おれのすることに邪魔立てをしてはならんぞ。おれがこの死の床に下りて行くのは、戀人の顏を見るためもあるが、むしろジュリエットの指環をぬきとつて、それを大切な用に使うためなんだ。だからあつちへ行つてゐろ。もし疑ひの心を起して歸つて來たり、何をするだらうなどと窺ひでもするやうだつたら、そちをずたずたに切りさいて、この飢ゑきつた墓地に撒き散らすぞ。時が時だから、おれは飢ゑた虎よりも殘忍に、遠慮なくやつてのけるばかりだからな。」

バルサザーは慄ひ上つた。

「はい、はい、まゐります。決して旦那のお邪魔はいたしません。」

「それでこそおれに對する友愛があるといふものだ。」と言つてロメオはいくらかの金を與へた。「さあ、これを取つて置け。そして無事で暮らせよ。では、さやうなら。」

「御免くださいまし。」

バルサザーは傍を離れた。しかし彼はロメオのことが心配であつた。何と言はれても、この邊りに暫く隱れてゐようと決心して、ロメオからは見えないところに姿をかくした。

ロメオは墓の手口をこぢ開け始めた。

「おい、死神。貴樣は憎みてもあまりある惡黨だ。貴樣の胃の腑に、この地上のあらゆる滋味を貪り食ひをる。さあ、貴樣の腐つた顎を引きあけて、もつと御馳走を詰め込んでやるぞ。」

パリスは靜かに近寄つて來た。よく見れば、それは追放中のロメオである。ロメオはパリスの戀人の從兄を殺した。ジュリエットは可哀さうに、その悲しみのために死んだといふ噂がある。ロメオがここへ來たのは、多分死體に侮辱を加へるためにちがひない。パリスはさう思つた。彼は忽然としてロメオの背後から吐鳴つた。

「やい、殘忍非道なモンタギュー奴。怨みを死骸に加へようとは卑怯だぞ。生かしちや置かれん。さあ、兇惡な所行をやめて、おとなしくわしに附いて來い。」

パリスの手はロメオの肩にかかつた。

ロメオはその手を拂ひ退けなから、背後をふりかへつた。しかしその暗がりの中で、彼はそれがパリスだとは思はなかつた。

「いや、おれは生きてゐられない身體だ。だからここへやつて來たのだ。この命知らずにはかまはないでくれ。早くあつちへ行つて、おれのことは棄てて置いてくれ。お願ひだ、若者。おれを腹立たせて、この上の罪を犯させないやうにしてくれ。おれは自分よりもお前のためを考へてゐるんだ。おれはここで死ぬだけだ。愚闘愚闘しないで、さつさとあつちへ行つてくれ。そして狂人の情けで危いところを救はれたと言つて、後々まで生き存らへるがいい。」

「どんなにわしに頼んだところで無駄だと思へ。貴様は重罪人だ。引つ捕へるばかりだ。」

「なに。お前はおれを怒らせる氣か。よし、ではおれにも覺悟がある。」

ロメオはたうとう怒り出してパリスに武者振り附いた。パリスは劍の鞘を拂つた。それと見ると、ロメオも自分の劍を拔いた。炬火の明りを受けて、劍が闇の中に閃いた。

ロメオの劍は遂にパリスを突いた。パリスは倒れながら喚いた。

「あつ、やられた。もし貴様に情けがあるものなら、この御靈屋を開けて、わしをジュリエットの側に寢かしてくれ。」

さう言つたと思ふと、もうパリスの息は絶えてゐた。

ロメオは炬火の光に透かして、相手の顏を覗き込んだ。ロメオはぎくりとした。驚きの聲が彼の唇の間から突走つた。

「あつ、パリス伯爵だ。どうか手を握らせてください。御身も自分と一緒に、痛ましい不幸の名簿に名を書き附けられた一人なのだ。どれ、名譽の墓に葬つてあげよう。墓だと。いや、墓ではない。あかりの塔だ。ここにはジュリエットが横はつてゐて、その美しさはこの塚穴を光り輝く宴席のやうにしてゐるから。死人さん、死人の手で埋められて、そこに寢てゐるがいい。」

ロメオはパリスの死骸を、墓の中に引き曳つて行つた。

「おお、戀人よ、妻よ……」とロメオは祈つた。死神は御身の蜜のやうな息を吸ひ取つたが、でも御身の美しさに對してはその力を振はなかつた。唇や頰にはまだ紅の色が殘つてゐる。タイバルト、御身もここにゐるのか。おお、御身の追善には、御身の青春をまつ二つにしたこの手が、御身の敵だつたこの男の青春を絶ち切るのだ。從兄よ、許してください。ああ、、懷かしいジュリエット、御身はなぜそんなに美しいのか。もしかしたら、あの影のやうな死神奴が色好みで、あの痩せた忌らしい怪物が、御身を隱し妻として、この暗闇の中に閉つて置くのではないだらうか。それが氣になる。だからおれは御身といつまでも一緒にゐよう。そしてこのほの暗い夜の宮殿から、二度と立ち去ることではない。ここにかうして、御身の腰元の蛆蟲と一緒に留まつてゐよう。おお、おれはここで永遠の眠りにつき、薄運の星の軛を、この世に倦き果てた肉身から拂ひのけよう。眼よ、お前の最後のものを見るがよい。腕よ、お前の最後の抱擁を。そして唇、お、息の戸の唇よ。人の命をとこしへに買ひ占める死の證文に、天下晴れての接吻の封印をしてくれ。さあ、苦い指揮者よ。恐ろしい指導者よ。絶望の水先案内よ。荒れ果てた海に、病み果てたこの小舟を、すぐさま波の碎ける岩角に乘り上げてくれ……」

ロメオは毒藥を取り出して、それを飲んだ。

「さあ、わが戀人のために。おお、正直な藥屋よ。お前の藥は利きが早い。接吻と一緒におれは死ぬのだ。」

ロメオはジュリエットに接吻して、その儘そこに倒れた。

墓穴の外では、ローレンス上人が提灯と鶴嘴を持つてやつて來た。彼は何ものかに躓いた。

「あつ、危い。誰だ。」

「決して怪しいものではございません。はい、手前はお上人樣をよく存じあげております。」

今までそこに蹲まつてゐたバルサザーが、立ち上りながら答へた。

ローレンスはキャピュレット家の墓地の方を指さして訊いた。

「あの燈火は何かな。蛆蟲や眼のない髏骨を、用もないのに照らしてゐる。キャピュレット家のお墓がまるで燃えてゐるやうだな。」

「はい。さやうでございます。お上人樣。あすこには手前の主人で、あなた樣の愛してござる方がお出でになられます。」

「誰がゐると。」

「ロメオ樣でございます。」

「ロメオだと。してあの墓穴にはひつてから、どれ位經つ。」

「かれこれ三十分にはなりませう。」

「では、わしと一緒に墓穴に來ておくれ。」

「いいえ、お上人樣。それは行かれません。でも主人は手前があつちへ行つたものと思つてゐます。手前がもしそこに居殘つて、何をするか見ようとするものなら、きつと殺して了うぞと申しまして、主人は手前を嚇しつけました。」

ローレンスはうなづいて言つた。

「さうか。ではここにゐるがよろしい。わし一人でまゐらう。」

ローレンスは墓の方へ歩いて行つた。彼は突然立止まつて、驚きの聲をあげた。

「おお、これは何といふ血だ。御靈屋の入口の石は血だらけだ。この主のない、血糊の凝りついた二本の刀。かういふ平和の場所に棄ててあるのはどうしたことだ。」

ローレンスは墓穴の中にはひつた。

「おお、ロメオだ。眞青な顏をしてゐる。もう一人は誰だ。おお、パリスだ。しかも血に染つてゐる。何といふ無殘な時が、この悲しい機會を與へる罪をつくつたのだらう。おや、姫が身動きをする。」

ジュリエットが突然身動きをしたと見ると、目を覺ました。かの女は上人の姿を認めると言つた。

「おお、ありがたい上人樣。わたしの人は何處にゐます。わたしの行くところはよく覺えてゐます。さうです、わたしはそこへまゐつてゐます。わたしのロメオは何處にゐますか。」

奥から物音が聞えて來た。

「何か物音が聞える。」とローレンスは言つた。「ああ、このやうな死や、疫病や、不自然な眠りの巣から出てしまうんぢや。わしたちが抵抗することの出來ないずつと大きな力が、折角の計畫を壞してしまうた。さあ、お出なさい。そなたの良人は、そなたの胸のところで死んでゐる。それからパリスもだ。さあ、そなたを聖い尼僧の仲間に入れてあげよう。ジユリエット、番人が來るから話は後にして、すぐここを出よう。」

ジユリエットはそれを拒んで言つた。

「いいえ、わたしはまゐりません。お上人樣お一人であちらへいらつしてください。おや、これは何でせう。ロメオの手に盃が握られてゐる。さうだ、わかつた。毒を飲んで非業の最後を遂げてしまひなされた。ああ、情けない。みんな飲んでしまつて、わたしのために少しも殘して置いてはくださらない。さうだ、あなたの唇に接吻しよう。もしかしたらまだ毒がいくらか殘つてゐて、そのおかげでわたしも死ぬことが出來るかも知れない。」

ジユリエットはロメオを接吻した。

「おお、まだこの唇は溫い。」

ジユリエットはロメオの短劍を引き拔いた。

「短劍よ、お前の鞘はこの身體です。ここでお寢み。」

かの女はその短劍でわが身を刺し貫いた。そしてロメオの身體の上に倒れて、すぐに絕息した。

數人の夜警がはひつて來た。かれらはロメオや、ジユリエットや、タイバルトや、またパリス等の死骸を見ると、この椿事を知らせるために領主や、キャピュレット家や、またモンタギュー家に走つた。そして墓地にうろうろしてゐたローレンス上人や、ロメオの從者のバルサザーや、パリス伯の小姓等は、嫌疑の廉を以て、領主の見えるまで留め置かれた。程なく領主が馳けつけて來た。キャピュレットや、キャピュレット夫人や、またモンタギュー等が、前後してやつて來た。

大勢の從者を從へた領主は、出て來ると言つた。

「いかなる椿事が出來たといふので、その方たちはかうも叫び立ててゐるのだ。」

夜警の一人が領主の前に進み出た。

「御領主樣」と彼は言つた。「パリス伯爵が何者にか殺されました。またロメオも死んでをります。以前死んだはずのジユリエットも殺されました。」

「これは殘忍な人殺しである。この事件をすぐに取り調べい。」

領主は嚴かに命じた。夜警が御前を退いた。領主の眼はそこにはひつて來たモンタギューの姿を見た。

「おお、モンタギュー。御身は早く起きられたが、御身の後嗣は早く寢過ぎたよ。」

すると、モンタギューは領主に會釋して、悲しげに言つた。

「御前、わたしの家內は昨夜死にました。伴が追放となつたのを悲しんだ結果です。この年老

いたわたしは、この上どんな悲しみにさいなまれることでせう。」

「あれを見なさい。」

領主はロメオの倒れてゐる手を指さして言つた。

モンタギューは始めて死んでゐるロメオに氣がついた。彼は悲痛な驚きの聲を絞つて叫んだ。

「おお、この不所存者奴が。この父を押し退けて墓へ急ぐとは、何といふ作法知らずだ。」

領主はたしなめるやうに言つた。

「いや、終りの言葉は暫らく封ずるがよい。お互に先づ疑念を一掃して、原因や端緒を突きとめることおや。もしも必要なら、わしはみんなの悲しみを率ゐて、死の眞只中へ突き進まう。それまでは暫らく辛抱して、この不幸を耐え忍ばう。嫌疑者、一同を引出せい。」

後見はローレンス上人と、バルサザーと、小姓を呼んだ。先づローレンスが口を切つた。

「このわたくしこそ最大の……いや、力の及ばない點では最小の者でございますが……わたくしには時も場所も不利なため、この淺ましい人殺しの第一の嫌疑者でございます。しかし兎に角、罪を問はれるわたくしを辯護もし、辯護されるわたくしを責めもいたさなければなりません。」

「では、この事件について、御身の知つてゐるかぎり、有體に申せ。」と領主は言つた。

ローレンスは答へた。

「長々と申上げる暇はございませんから、簡單に述べさせて戴きます。ここに死んでござるロメ

オ殿は、あのジュリエット姫の良人でございます。またここに死んでござるのは、ロメオ殿の操正しい妻でございます。二人の婚禮を取り結びましたのは、何をかくさう、かく申すわたくしでございます。二人の内密の結婚の日は、姫の從兄のタイバルト殿の最期の日でございました。その時ならぬ死のために、花婿はこの時から追放になりました。ジュリエット姫が悲嘆の涙に暮れてゐましたのは、まつたくロメオ殿のためで、タイバルト殿のためではございません。そこでキャピュレット殿は、その悲しみから姫を取り除かうとして、パリス伯爵と無理强ひに結婚させようとなさいました。すると姫はわたくしのところへ飛んでまゐられ、氣が狂つたかと思ふばかりの顏付で、この結婚を遁れる方法を敎へて貰ひたいと申しました。もしまたそれが叶はねば、わたくしの庵室の中で自殺するとも申しました。わたくしは法術によつて習ひ覺えた催眠劑を姫におあげいたしました。果して姫には碧み通りの利目がありまして、死人の姿となりました。わたくしはすぐロメオ殿に宛てて、藥の力の消える今宵、ここへ來て姫を墓場から連れ出す手傳ひをしてくださいと認めた書面を、僧のジョンに持たせてやりました。ところが、ジョンはふとしたことから途中で喰ひとめられまして、昨夜になつてからその手紙を持ち歸つたのでございます。わたくしの考では、姫を庵室に隱して置いて、折を見てロメオ殿のところへ赴くつもりでございました。それにわたくしがまゐつた時は、姫が目覺める時刻の一二分前でしたが、パリス伯爵もロメオ殿も、ここで淺ましくも最期を遂げてゐました。その中に姫が目を覺ましましたので、わたくしは天命と諦めて早くここを出てくださいと頼みました。その時物音がしましたので、わた

くしは驚いて墓を出てまゐりました。姫はその後で、多分失望のあまり、自害したものと思はれます。わたくしの知つてゐることは、これだけでございます。二人の結婚のことは、姫の乳母が承知してをります。もしまた少しでも、この過失がわたくしのために生じたといふ御裁断がありますれば、やがて來るべき天命に先んじて、最も嚴格な法に照らし、この老いの生命を犠牲にしてくださるやうおねがひ申上げます。」

「いや、いや、わしは御身が高德の人物であることをよく知つてゐる。」と領主は言つた。「ロメオの召使は何處にゐる。この事件について、何か申述べることはないか。」

バルサザーはそこで答へた。

「手前は主人にジュリエット樣の亡くなられた知らせを持つてまゐりました。すると主人は早馬でマンチュアから、ここのお靈屋へまゐられました。そして手前にこの手紙を早朝父上樣にお あげするやうにとお命じになられ、御自身は墓穴にはひりながら、あちらへ行つてゐなければ、生かしては置かぬぞと脅やかされました。そこで手前は主人をその儘にしてまゐりました。」

「どれ、その手紙を見よう。」と領主は言つた。「これへ出せ。」

領主はバルサザーのさし出す手紙を開封して讀んだ。それからまた彼は言つた。

「伯爵の小姓は何處にゐる。お前の主人はここで何をしてゐた。」

「はい。」と小姓は答へた。「主人は奥樣の墓に撒くため、花を持つていらつしやいました。手前に向うへまゐつてをれと申しますので、側を離れました。間もなく炬火を持つた者が一人で墓

を開けにまゐりました。暫らくすると、主人はその者に向つて劍を拔きました。ですから手前は夜警を呼びに馳けてまゐりました。」

領主は滿足さうに言つた。

「上人の言葉に僞りのないことは、この手紙で明瞭である。兩人の戀も、姫の死の知らせも、これまた相違ないことを、この手紙が證據立ててゐる。それから、貧しい藥劑師から毒藥を求め、それを持つてこの墓穴にはひり、ジュリエットの側に眠らうとしたことも、ここにちやんと書いてある。この敵同志は何處にゐる。キャピュレットとモンタギュー。御身たちの憎しみの上に、何といふ懲罰が降つて來たことか。天は戀を以て、御身たちのよろこびの種子を殺す手だてとした。御身たちの不和を不問にしてゐたわしも、そのためにこそ身内を二人までも亡くした。これがわしに對する罰であつた。」

キャピュレットはモンタギューの側に寄つて、その手を握り締めた。

「おお、モンタギューの兄弟、お手を握らせてくださらんか。これが娘の結納ぢや。この上望みは何もありません。」

モンタギューはキャピュレットの顏を仰いだ。そしてその握られた手を強く握りかへしてから靜かに言つた。

「わしはもつとおあげするものがある。姫の像を純金で建てませう。このヴェロナの町がヴェロナの名で知られてゐるかぎり、眞實で操正しいジュリエットの像ほど尊敬されるものは、他に

はありますまい。」

キャピュレットはそれに續いて言つた。

「そして娘の側には、ロメオ殿のそれに劣らぬ立派な像を建てることにしませう。可哀さうに、二人はわしたちの不和の犧牲となつたのだ。」

領主は二人の親たちの顏を滿足げに見やつた。そして二人の手をもう一度結び合はせて言つた。

「朝が來た。靜かさが物悲しげにやつて來る。太陽は悲しみのためにその顏を現はさない。世に悲しい物語は數々あるが、このロメオとジュリエットの物語にまさるものはあるまい。」

世界名著物語

ハムレット

定價六圓

昭和二十一年十月廿日印刷
昭和二十一年十月廿五日發行

編者 鈴木善太郎

東京都神田區猿樂町二丁目四番地

發行者 前原久夫

東京都神田區神保町三丁目廿九番地

印刷者 長苗三郎

發行所 東京都神田區猿樂町二丁目 合資會社 新文社

電話 神田 二六二三番
振替 東京 一五四二〇番
會員番號 A二一九〇八九

配給元 日本出版配給株式會社

明和印刷株式會社印刷

982
222

終

定價 ₹6.00